闕疑抄 下

内閣文庫

番號	和 24890
冊數	2 (2)
函號	特 116 3

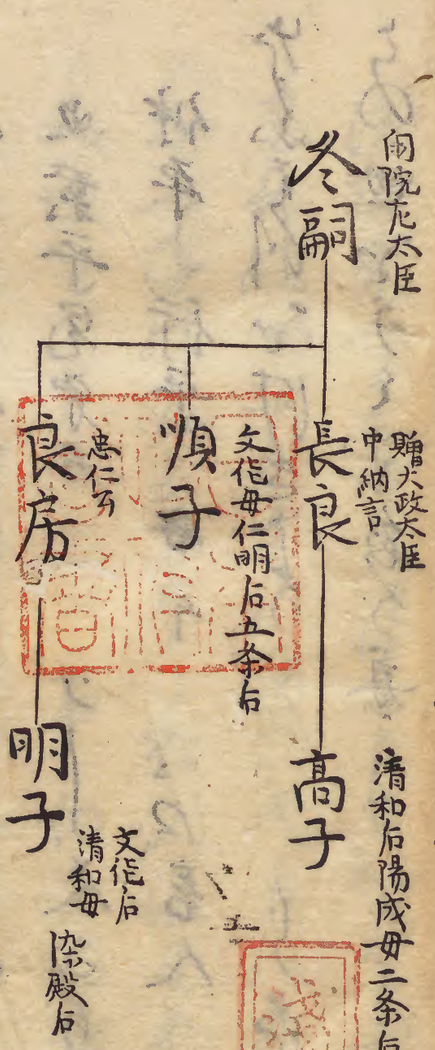
内閣文庫 和書

類 二四八九〇 號 一一三 函 一二 架 二 冊

内閣文庫 和書

類 二四八九〇 號 二 冊 二〇二 函 一九 架

国立公文書館 National Archives of Japan



浅草文庫

此頃又不審なり立系后ハ順子染殿后ハ明子
と系篇ハ乃ち[illegible]可動之　水尾帝門と
ハ清和の事也此天皇ハ二室内侍一[illegible]
母ちて後ハ山城國水尾とゆふ所に隠
遁ありてまゝ[illegible]と[illegible]所乃山今至而

ふあり

ひとりはとこしたのくるあにあり
ふとやくともらひさぬくなふえの方ゐ紙
きりなるさを見まは為うもあるとなく
ある不知りあり業平時ありあるいまく陸と
ありけるふや知なとへ下ぬして遠国あり
也業平兄弟五人ありひとり人あり

仲平　行平　守平　大江吉人　業平也

なふそりけきうらうけのうらあらるこ迷や
この世をうくるあり為

後撰集ありけさそをふしそとうけ
見られ心はとていい能重也下れあるいあ
おもひれ海上ふうれ又法ふありて真ゐり
又世をうくるふ事わさの家狩りへて
積ゐ也ふまやはとはとうい世間の事
狩はひあそせくいう也はけさは今朝
あるいまこそといふ也
まはあられうて人くあるまり
ひとり男せうえうしにおりふとうれてね
ていけくの國へきさう許ていれきり

ちのくにいこまの山をはるばるとこえて
ちかの浦に雪やまじりてふりぬるに
きさらぎ雪いとゝしろうきに
雪ぬぎ捨てのゆくへもなくひとりまち
きて

前の阪のつゝきも二月晦日ばかりの夜ふ
葉平生
ゆるがしの雪のたちまひ散くるふは花の林をう
しぬぎのりなり
ゆり出をしとまたちを同道してきしるれみ

雪のちらまひて山をくすぐる如をのれ変也
散くるふはうけるふは心の内の雪のいとゝ
しろきはゝ千万株の花のたりて花の林の
ちとしきのふの雪はこの花の林を我
人丹見やとおもひ出る懐惜の心有る也
狂雪紅傳月の内の内の今雪のふれゝ一入
おもふ 不論見をとゝ和しこゝろん
とよめる也うとまるゝ人はしいれしと也
五蓋相通也おしとゝ也以雪花也背学の時
もとゝあき出きる時分にゝくせ

たあやみくあるものをのこるかとそんしり
称くいはいてかくいけといふ心をおうへし
是作者乃知りふ面紀而也
ひとりはさこしのみれ國へいれきりをみうう
のこりの住よりれ清とそれよりのそはをゆ
くみいとおりりるをれは出り井つゆくあり
人をみはりれえまくあやいふ
ふくを旅の版のつきれたく住吉れそはを
めとりうういい俳諧おるまきれをそよ
りの新版見よりの里住吉乃そはと面白

加きりりをそれるそれうをへの名ありけ
里住吉の清くを住吉乃そはと横路あり見よ
りの新冷はあ生也上吉れ名ゑくしろこ
と変りに此物語の附かいりうを志つん
雁ゐくを荒れ花さく秋いあきと春乃海へりを
みりりそは
住吉にりゐ住吉ふをくのそれさくとよむ
みはあるゐ世間れ秋乃京氣といふ也世り
雁ゐ荒の花さく秋はあきこと今荒れうをへ
ふ住吉れそはハその秋りを形はさきると

いふまでもなし　白髮のかゝるあさを感慨
生てふきゝ乃義れうせ
ぞよりなれいみゝ人くよまれまりより
感慨をおこしてはゝ方よりおもをあるまし
なれい贈答中ばんとそみゝ人く
ゝをよ後さうあり
ひとりはこゝのりきりその母とこいせの國よ
りのつひよいたきりて
はゝ乃事　髮号の附函ゝり俳諧物語といふ
髮号ゝあゝせんゝあゝ乃紙をりにあ

りゝ中あり俳りゝ和ゝ也不用説也物れ使要
ひゝいゝ誠國へ物とさせんゝあに勅便をた
てゝ乃事國史ゝのきゝ書ゝりと乃て
ゝゝ光孝天皇ゝの御時丹波ゝたゝ
ゝ也業平い俳諧屋敷國乃物れ勅使よゆく
あり異朝ゝも巡狩ゝ自分国ゝとめくゝて
りゝをいを國れ治居をゝんため也この國
ゝも一任三年ゝく吏勢城ゝ所屋敷器ゝして
ゝゝ物ゝ國城ゝとしひゝふ歳任乃りゝ
ゝふと國を治ひゝ物又民のうきへなゝと

ふうさんさ紙兄をもめんとあ也國より寄可
給やうふあひしらへハ延任させら弘〻〻
とも也ゆりめは事乃兄もうひやせとのゑ胡
ゑうらのつひうてはつハうゝ事
なるへ
ものいをの家家なりけるへ人のあやつ兄つか
ひしりハうの人よくいてされといひやまをは
まをはやの事ゆりなれはいと称んあるう
いさりをり
家家ハ恬な内親王也惟喬親王と一服あり其
家家のあやを名虎の女紀静子也されとも也し
親とりハ深度の名とあるへ家家の継
母也されとも如実ゑ志ゑ為あり又業平源度
名へ都礼ゆをハ清和をくをへ殿をれあり
一親の方ゆり初をうへら弘ゐにりて
為りしてゑ紙ゑへらを迷ゑうあり
ゆりたゆはうりりそそ殿りゆゆさ
里はゆりつををゑりこをせをりゆくてね
ひこるはいをつきゑりゑ二日といハ秋野をこゑ
ををあをんといハ女ゑををいをあをこをを

おもへらはされと人めしけゝれはえあはさりつ
つかひさねとある人なれハとをくもやとさす
女のねやもちかくありけれハ女ひとをしつめ
てねひとつはかりに男のもとにきたりけり
そこにより此世末代居なくともあるへし
ねんころにいさゝかも労の字也ねきらふ也
二日といふ夜業平の下向より二日めの夜也
われてあはんといふわりなくといふ儀なり
瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧河のわれても末
にあはんとそおもふ　二日月ハおほろきを

ね恋しさまさりて燃ける雲のよより
女をまつとありしとおもへる心にハさなくよ
里頭家まよりたまへハ夫婦のかたらひをと
ありし夜ハあたなしとおもふましき
事とも其目給ハそらなりこの心末にみゆ
使さねとある人なれは勅使なれハ雑舎なと
りしを思ひ出まあるへしとや子ひとつはかり
とハ一刻を四にわけたるの也その一也
ねところにきたりけれはそのかくさをミハ
たゝしてふせるに月のおほろなるにちいさき

まちハとはさにそくんして重井とこいとう
連歌てまちぬるせあるりぬていりて詠ひと
つまりうしら月まてあるにまさなふきとまつ
たらりぬ井の庭り井きり
月比拵ろけらにかりのつゝむハ史略春二
三月也吉住心は五月四日とあるうち志うく
詠ひと行りうしら月まて夕れ剋りり丑
の三更まて也時こなふきとを嫌こらりぬふ
たしふあひそてまいるとおくん色勝お
もし詠しされともあひやうなふ事いあり

栓志つくんうれふや高階殿ハ秋家腋とて今
みうの邸ハ素家不叶とて高階峯緒子仰尚実
着業平の息ありといふ
井とこいとうなしくて詠をありまかり清く
めそいふくしまれとてまつん住居の庭に井し
あり詠むいと心をとなくてまちたまはあけし
ありて志たりありま女のりとまり志とハこ子
くて
いふかりハおころもとみれ心所り我人とや
此へきふしをあり詠はいくりてやすら

物心ついて後朝の文を待わびて袖の
露やこゝ我やゆえなく涙の
ぬるゝかの覚てう
古今東十三歌家なりけり人はよりとあり
この歌ハ〳〵露やこゝ我やゆえなく涙
ふる心ハ我れもゆえなくといふなり
ひのべられなり荘子の夢蝶ハなりと
のたまふ又蝶の荘子になりたりといふの
ごとく
想こいとゝいてうあそよめ

葉平やその折りかけれさは想へ
ゆとも忘るゝ神也
紅くゝれなんの乃やをにはゆ
いこしひはさめよ
きゝやこゝ我やゆえなきんといふ事
わきをうけ侍るとも何とも物語を
夏のうつかを今東てさあとよりあり
古とゆはよひとさためよとあり歌うさ
ゝあるゝいふ心也この物語ハを説とつけ
れとも今東ハなゝ説はされ侍へ

あるれあるこころはやとはゆうとまつ乃ゑ乃
美とたまつのさとめん
せとみて乃りてゆりみいそぬ世てゆりゆ
まるるハをるみくこよひたよんをゆめていと
くあるんとまあよくみれうんしゆきのえ
やのうんゆゆるるうのつるひゆりときて
よひとよさけのるるれはをるあひこと
もえをくあ毛はれるりれくたへちうんせは
きハはくこをんをきすちのなるさをなっせと
えあるえよやうくあけうんとまるるにか

うたるりいさひさるゆきれさるにるさをるは
ていうるるりてんきな
國乃うんふて伊勢寺ゆく欲家乃以城煎乃
ものくさて被ひとよさけのを饗應をるすち
をるる者一にあひまらんとまるまをえせ
さる也尾張の國へ伊勢乃將ハさて尾張へ
ゆくあ日一國乃内のうれ使の日數を定た
里女方ら乃事あきハはくこを人をきす
とあるるく被家れ心を学をら血のなる
はを恵切の而をいうんとそ物いふなり

ふらんれとあまきぬえ　ーあまへ
上句ゆうりを出うりあるハ淺きえんとい
てんうあ也一説あひ月とあるといふ山ふ猿連
句のれうりとるふやや
せうれくをいふ　そのさの月のさふふつ
いまりのみどてうきれをきつく
ついまりたいまり也續松五吉相通也松をお
續くとをしりにいふありそのとりさし
りさとみあく寺清く也
みあふさつれせきハこえうん

新へのりハあうれえんと猿ーめしと
をまきあふをとあるを西といふあり業平
西京の道ありあふさうをそへよりり
とそあくれハれりれくあへこえにりり歌家
は水乃とあの浮岡文遠天皇れ西女ふまたのれを
このいをうと
られハれのとれ行乃やうよ寺うり

閑疑抄巻第四

ひとり知くこうれつひとりのうきけ
ゝ丹史よりのわうにやとりて河きの家れ
らをくるいひとりの子
茶の阪堂れなり　対馬也尾張へゆれて伊勢
へ又ゝ尾ゝ[illegible]事也大よりハ伊勢尾張
乃道のりくらゝ河きの家のりゝハ
へ家家ゝ[illegible]ゝ女童也下ゝへなをよ
てをくりなとり屋りゝ人ゝ
乃ゝゝゝ方やい河ゝそさかけて我ゝ

をしへよあすの作里をも
欲家と今一度見まほしん事をかきよとしへ
よういふ心ありのものとも事をせこの墾
しうる物はとりのくはたりのうれ事
ありの小町堂の記和へ出をもく附　和田原八
十語りてこさいそねとんみはつけよあま
の作り舟といひ又為業代可了　春日殿代
光次の野ちいくくのつりあ業代
をてんといふもうるれいり此もえいくん
とぜてんなは殿守うれ業内者うふ為代
なり法ん代乃ちめうり為代なりハあまのつ
里舟ちるへさきんといふ也
ひり出くこれ欲家よ内の作つひみくはい
遣里代の家をきあをいひきあを
たくう事うく
数寄事この字濁ちくしへれなり物
使代附ようきいりみくをくく市使のとれう
数寄あとをちうくしあうよ業平にうは
りくありをれとといふと人乃名といふ説有
数寄ふれ事といふあり内代作つう

また くしふあるを ちとやみる神れいを見ぬへし 大家人
のをまくるし きみ
指遣人也 らをやみる神れいを こ
えぬし 冷い 我身の和しきをな
上白同物也作事也 さて神のいを見はこえ
ひ事ふあり 称とも業平を見はかし きて
いふありいきをこゆるハ法家城ありて を
ゆ見れといふ心ありて 大家人ハ貴乃上人を
いふ 業平の事也

却てこ
ゑしくいてををようちとやみる神乃い
さひろ道あらなくよ
上白別のみ細なしらひしをハふをへ
をてををよりくんのいとむふ道ふをあり
すと也をのをいりふて陰神陽神とありし
うへ従神の制をる道ありしと也
ひし却さこの世のくをみありけるを又えあむ
てとありれくにへいくとそいみしうをを
きれハ女

女とは欲家ゆり前の阪同事也世なりの國
屋敷也前へ出てりて来うり
大よとは松いつも世をあらなくうらうして
のくまう屋ろ浪武
大よとはうらうて松のあるをそのまくて
なるとはいつも世也屋ありしくをいうらうあるや
う世されともさうまいはいろくをあると
いふその心ハ業平の歌をいんしう拾ら忍恋
ともれ丹うらうんこはありとまはいと波
とかを屋くるもむ世　大よとの月にう庭をて

う屋ろ浪松いつもをあるしみくよよ
ひうをこみはありとさけ世世うをこをとか
いふへくをあるねのあうをはあるをきう
せう拾こ文也消息かをたをなとかうたら
を言信の事をといふ也あるハ初をういさ
ぬ心ありう
めふハ丹くをみはこうを世ぬ月はうろうろう
はおとき君をそのりをう
月中のうう丹拾へていふあり波こ
とうよはたとへをあるめみは見なるまを

とうきぬるの也は所を万葉集かはのいき
里例の伊勢の作物語乃之説あり
ひとり坐とこ女をいとうらゝて
岩ね山そ万さあり山へハ山て孫とあるハ月出
かきこひるとふふ
子山万水をふ河きとをあるろ此ひるふを
ちあきはあふ事ハ中まい山河をへた
てされとあるいしくしひるとあり
万葉ハあるハ日あまきひてるふのをと有
ケトウをくゝ例の伊勢の作物語の説也

ひとり坐とこいをのあるあるぬるとをてあるひ
といひるはをんを
ふるを万をひきあていたてあるんとあり
大よとれを此ハ坐てふるふ心ハ
ねのとらひとを
見るうゝといをんとそ大よとれを此ハ坐
てふとハ万心ををきぬハ心ハなくさを
ねあり心のやうきいるといふ也かとらハ
されとも見るうゝふくを心ハなくさひと
いあり祇注元是ハ業平伊勢国にいきてあら

ひといひける時歌家の序也上句ハ序也くらく
見ろかうりなくさむ物そうくらつると云
心あまり業平があまり丹志うひまいらせさ候
歌ろをいひのうまんとそよめる歌也かさね
こはなくさむ心あまり業平がまぢん詠すくさ
むか儀也見ふうろそりとは一きひ歌見てに
ましし心なり大かとれ浦ありうらあは
見るめたえし露はえてり歌ろ居合
といひてさしてつまきなかわきれは当
うらとけくと又ひとくへかとまる上古乃人れ

心あまり

袖ぬれてあまのかりほすわたつうミの見るを
あふにてやまんとやする
序云也見ろとあふにてやまんとする乃ま
の心ハ見るとあはりふそハ見えやむまじき
いふなり
とんか
いそ歌なりあふ見ろめしつまなくいきおひ
しかみうらむをも有らん
見るハ岩間よりあふなりのうまハくいへ

是乃うめ一法さなく八乃うめハとりふく
不要の物也されハそのもとくなれのんけへ
不要ふ一てそとあるなしは男れなの心
かしー一かうかたうかたう心ゆりとも動きも
のをといふあり波辺云うゑをありあんは海
邊れうさなれといくへこと心い出うへう
うんの儀也是色業平をいさめうう方也
ちいろとをいくでっきしんん定なくみちひふ
しのものとけうねを
世ゆり

まさとこ
なるさよ袖ぬきつ一ゆふ世乃人乃つうき
ちくろいうくれ月の
つう袖ハちゆのみちひふはぬきを袖をるう乃
つう吉心う袖の月くとありてしゆふ
ふきう
世ゆあハきを叶ゆ紀世はうん
恋面白袖ゆ也月学一ひあひうりしのち
つ月ゆ一ぬきあ一袖文の恋心うあうさ
ふ事ちうみく乃こう一袖れちうふく

嬢紅のうしとさう宿紙少や業平朕名誉のこ
と地祇不通しうる強撰なり其末孫い今
の高階氏なりいさ始まて史祇家へ始い京変
ふかりしなのちうしに掲要也すてにこと
文明九丁酉年いてうて五百九十八年なり
奇也しく元慶元年ちう文禄五年まて七百十
九年欠
ひとり二条のきさき朕始ゑ春家朕をやもん而
とやけう時氏祇よ始うてたまひきる母この歌
はうのさまはうひきる和きる人しくれろくた
まうう作いそる清事ちうう始りてしみてた
てまうりけう
義家乃こやす而京家の母儀をいふ氏祇大原
野社い新詳之年間源尤大臣冬嗣公の我氏祇
義日と勧請ドされうり藤氏の名家ハ必行啓
ゆり五条右頌子のちうめて行啓也うの歌法
かさ業平朕ハまと羽林ちくハあるへう
うく後ハ拾遺を託ちうふ朕うく年欠作物語
なれハなふとを事へし個陽殿院也貞観十
一年義家ハ元于時二歳業平ハ貞観六年之

月花近衛殿御出仕之家の女中行啓の時近衛
司不審あれとも背学二月上巳卯日十一月中子
日まつりの時文遊の時仁寿元年初而参の
事の時をまれ里ハ菊氏名家より所行事
あらと也人くれたらくしあらはるの啓ハ
あらに裾を引下あり
たつやをしの山をたくふこそは神代のこ
とを引ひいらめ
長のありて優あり方家より家をやを而り啓
あらにを照大神と春日の神との歌り給
ひしに相度のむらをもひいてとまとんと
ありそこふは二条乃右大たう人乃時系
通中事を引しめいてこはやといふ
心ありの神代とはなくれ心ありの人といんた
ありあり風れ方なと心はまきらをかとをへき
ふや上古いたるこうを底ちんかつあくあ
きなんの物ん紀而あんりあり江次第ふを東家
乃行啓の而りの也こうり名答也　江次第十
四大原賀行啓起五条右頃ふ以菊氏勧学院衆
為事副二条右高ふ以姪条事後在五中将春和

哥子二条后哥畧之人疑之是若有密事欤
とそ心ゆをうかゝ[illegible]とやおもひなんいゝ田
ひぎんさうしゝ
ひゝ田むられをゝ中をゝと物す
まゝきりそのとゝ乃女はたゝゝ志とやすみ波
世ゝうきりそのうせたまひて安祥するゝく尺
たゝゝきりんくさゝけ物えてまつりきりた
てまつりあ川めゝうのちさゝけむゝうあり
世こんくれさゝありのを木れえふつけてた
うのまへゝうさゝれい山を行ふたうのま

へはうこきいそゝとゝやゝうゝうんゝてけゝ
田村の法門ハ謚号を文徳天皇とやたてまつ
ふあり田邑山城山淀あるゝれをさゝきゝ
れさめゝてまつりふゝよて田むゝれゝ叫とゝ
中ゝきゝ清和天皇を水尾帝門とやのことゝ多
賀貴ゝ良相公のゝあゝり文徳天皇乃女御ゝ
いゝ波ゝうゝゝゝ[illegible]ゝまゝ也女禅寺山科ゝ
あゝり弘法大師乃法者子真雅僧正の時丑条后
頃ゝ法遠立大元ゝ乃ある寺也頃ゝハ仁明天
皇の后文徳の法母也ゝくゝさゝき物樣物と

て法願乃御文しくに卿殿上人まいらせる物
歳令のうち桜は付我い本内桜に付うう
こたくいくそくあり山をさうは雲のまへは
おりるくいをり動せぬ山の俄にうこきい
てうやうあり愚見みは内ゆさ中陸奥帯渡
四十九日あらりて法講彩行と可り
それを大大将にいまをうけるふちうの法
称ゆれも中いまそうりてのうのをそうに
うさむ人しくとめりあつめてうれをわさ
と愁みく苦れうろうそくあうそてまけらせ

こまう山のむまの久たりをおきかめてう
ゑなうしみをう
かうれそうかいハ講也むはれかを業平
也めそうゑなうの用将のひを作なうや
肖哉同心也的不入道のうひを他ゆと源氏は
めの類也後成恩寺殿ハ用也遠なうと見物
ゑり山れうたきいくあうやうり見えう
といハ業平のめいたうむかう也
山れみかう月星くなふと
れをとうとなるへしう

やまをたゝかひ敵をうちとれ
とゝ[illegible]なり[illegible]
なれ[illegible]一ぢやとしく[illegible]
くゝ[illegible]をかけやすをたゝかひ
ぬゝやとゝいふこゝろは[illegible]
を時[illegible]をゝ[illegible]
まんゝはめしあるへし[illegible]
う[illegible]を時の[illegible]
のをよゝ事ありそのゝ[illegible]
を[illegible]

とゝみうりけるをいまゝはよくをあうけり
きりそのゝ[illegible]やまけりなんあられう
きり
[illegible]席[illegible]
者の用心[illegible]
えゝ[illegible]
[illegible]
安祥寺五条石頃子之建立寺也常行貞観六年
正月十六日条議八年十二月十六日右大将世
一業平貞観七年二月右馬頭を安平女御注度

如何若後進善歟

むかしたかきこと申す女御おはしましけりう
せたまひてなゝぬかのみわさ安祥寺にてし
けり右大将藤原乃つねゆきといふ人いまそか
りけりそのみわさにまうでたまひてかへさ
に山しなのぜんじのみこおはしますその
山しなの宮にたきおとし水はしらせなと
おもしろくつくられたるにまうでたまう
てとしごろよそにはつかうまつれどちかくは
いまだつかうまつらずこよひはこゝにさふらはむ

むとのたまふ
是ハ前にありし御所也一段しく別なれハ如
此ありけるにや勘物云女御従四位下藤原多賀幾
子右大臣良相女嘉祥三年女御天安二年十二
月四日卒常行西三条右大臣良相一男山科之
禅師人康親王也勘云人康親王仁明第四品
弾正尹号山科宮貞観元年五月入道同十四年
薨四十二勘物云常行ハ右大臣常行貞観八年十
二月十六日右大将二十一業平貞観七年三月
右馬頭に任と有女御卒ハ天安二年也されは

年數を遠也は作者後延喜欲おこなはるゝを
あやまりおやや天安二年よりはいつまを後の
事也四ケ条の事也七〻日〻
ちうもんはあるらん不審也後て作物語か
かくやうにその人はなとうり月なとたか
たて事なかやや又人康親王を禪門とやう
なる事をいふ空論也ようさえておう
ぼうは山かゝ開ふかあるようく不審をそなへる
ふ所なるなり道遙勅物云如淳爰業ふ貞觀
十三九廿八卒と所り常行右大將に任ぜらる夏

貞觀八年十二月廿業平右馬頭貞觀七年三月
と所り人康親王近家貞觀元年也同十四年薨
とあり此儀ふよりは女院卒ぜらる事貞觀
十三ようくこのぜうにあるなり彼此他年
可勘之愚見は如淳八天安元年十一月廿四
日に卒ぜらるゝ后文傳なとみを見てこうり
おうれとも常行右大將に任ぜらる事貞觀八
年也業平右馬頭元同七年也おうり八此女院
卒ぜる事貞觀八年以後の事なるへし

見こよろこひ奉りてよろの枕ましれぬけ
世させたまふさ給にこの大将いそくたりけり
給ふやう家法の八れりしめふくなれやいあ
承西記三条乃指南をゆ給わし時きの国れ于里
乃をほえしありけるいをわをなるきいした
てまれ生里出得をゆ給れのちよそ伝法ありし
うハあるへ乃みさうしれまへの見ゆ奉る
ぬりしをさまうのこさまふきとなうこれい
しいふそまつりんとのよ伝ひとをれい志ん
と鍬盟志集まりよ流わ宗旨

よろの枕まし叙法席よろの寝所なとれ事
也ある大将いくこたゆりふまふ日本記补
代上宝鏡図像監説第一云思慮と未ふり万葉
ふは方便乃二字をよ伝せふり四象う簡とろ
心あるへしとこふ成やい直の字の心也よし
をなくしてふらはいりふと也家つくへのさ
しめ秘道ハ何との金上すへきの儀也三条
の指南をゆ給わしと紀の国れ子里れを伝
よ清和天皇西三条右大臣良相れ百花亭へ行
幸乃時乃事ありて百花亭といひて亭へ行幸

四月居なりし花を見るやうにおぼえしと
也勅云奥觀八年三月廿三日行幸太宰大弐藤
百花亭に行幸の事紀伊國の名所の
まの石とりよせ給ふ行幸以後お来まる
ひとに人乃屋に船よせ給ふ也酒こ
乃見たまふ禅師れ右い泉水をこのませ給
へハ御ぞ給ふ事ハ御せてまひらせんと也法説
ハ烟霞風病疾泉石入膏肓に事を引給ふ事
ふれ也泉水をぬ古事事ありくく
いくとなくてもそなこのいしきさし

ちりハ乃ふハまされ里見をくうてます
所ハとそ乃なるへしとそ人くそうそなる
せまふみきれひまの乃んありけり人乃をな
ひのとれこけをきさ乃ぞまれ乃れかとよこの
うそ給つあふとてまつりける
愚中勅云右大将俊行監右馬乃お伴弥行監と
ハ左馬寮ハ左大将太る寮右大将見をけのこ
とうなり此石をくしてりハ乃物見をもう
をる物ありこ里ハきくりをる見ぬけり
をるといふ御りくにたてまつハ

なるべし　石りうちのつきのかやうなるハ
せいふまうろもくなるべし　まさきを貴さ
をてまれなるのかつこふこけ綿ささえまさき綿綿
きをみて業平の云を蓋し寄絵を事あり
あるをとを岩ふうりの色見てぬ綿見せん
りれなるれば
見ふくを波見すふ事ハおれをも綿綿
岩ふかをくるを業平とあり前字人をおもふ
心ハ色見てぬをのをかくくを波見るを変
ハふきれとを岩ふ色てん綿見るあり

ふるハあるりり見ん見ふなり愚見ふは波岩は
心はあるをとも色見てぬ情れ物を見を
んたりれなるれい岩ふくてみせて
まれんりありと河り波綿りあるを
をハるにるれうの物をおるへとも事たら
ぬありあるぬ事ハ不見ありされハ岩をま
いるせんと思ふれたに見るあるを岩
りうの色をいるるをれふを物あるを
を辺業平乃云河りめのまりりく演りう
うやうれ事ふくれ云ふ綿ふくハ石ふるれふく

ふよ不可仰合近比面白よし聞侍れとも也
ぜんよりきゝ
ひとりらのふかふかこうはれ侍りきり
はらうやに人くらうさよりけきりはれちうと
きゝおきのよめり
氏代中に親王代生始也在原行平の女腹子貞
数親王ひまれたまふ中比也貞数親王女を
業平乃姪よあるこ是ゆ侍りはれちかゝ貞
数親王乃母れはらハ行平也行平かゝりを
ふれきゝうは業平也は貞数親王ハ八歳ふて

陵皇を寵ふ給人ふり
我ふふちひろあるうけをうへつまい友ゆた
まつうれうう面白
我門ハ我一つとゝふ儀ふり弱代竹ハ仙家
ふあり竹ハ空虚ふしく廉潔ふり直にして
節ふうものふり道代心ふ行ふふ也仙家
の作乃ふ物ふりやうふひさしきあらんと
きゝ書余長意我物ふ祝初ふうへ一友ゆハ
地寧察樊ふしてふ人の苦痛ふ付せその友
をふをこのうけふ丹かくれい地をなくふ秋百

歟おらんといふ心なり
こゝに時に人中將のこゝろ
いひけるのまに中將言ひたるのひとあの
ゝ也
業平は色代人なきハ〳〵やと人不審して
いろ〳〵心を翻云貞數親王清和第八女中將云
行平卿也延喜十云夢四十二
ひとしなべてはいろいろのはなちらんとす
人あり きりやすひらの日あゆゝ
やおろかんとへ
はりてそまつ〳〵とそ

よめる
業平乃ゝ家をひけるくりふ也古注に行平
家といふ不可信用たゝかとへ
句業平乃云也
ぬきつゝ捨志ゆくゝ
うゝもあり〳〵と
古今集第二業平朝臣の方也
といひ歌をいふなるてあり
毛歌をいふ
の注おもりを

一ちくはいくうきあるしと云ゑ面白ありし
明日よりふにいたるのをあるしとゆふはれ
遠といふあり所れハ高道をもつて学人乃い
ひ事なり明日昏日すひうゑてうやうよ
のひくくしくくいてふうきとく也
むり左乃杉はいまうちきいはそうちきり
ひもつハれかりにゆ糸わうり家といと
杉ろくはくりてゑみたまひきり非常用れ
はこを置かとくれ花河ろひそりかちよ
みられちくさにゑいりありこちあす
ゑさせてゑひとよさけのあるひてゑあり
けるそかりにものとかりあきかひ
ゆうさもむきこ丹ひりきりあれいと
しきりきよりひ河りそてんよんよまも
そくよりう
左の指いまうち右勘云源融流滅家十二任
左大臣元大納云五十一任和二年従一位寛平
元年薨車七年八月薨七十二ひ川のかとり
ハ六紙ときりかきハ未ますをゑうれあり
ゆに六条ゑくも賀を河れかりとゆふへ

国立公文書館
National Archives of Japan

のち法くめけあり
志かは五十ふ川のさすゝちんあさゝなるに法り
もろ舟八あくによらうん
あらを端的れ塩竈ま志なしてまれ八ふ川
はしかつまのうし舟八さねらん法里もろ
かのもあらぬよきとよみ置しかはまさ
ふかれあとこよ夜さかれ雨お物しは山谷
乃昼夾千里影をみ詩は恵崇烟雨芦雁坐我瀟
湘洞庭欲嗔扁舟湯去故人道是丹青と法了き
ふ志に同みや古今 みちのくはいつくはあれ

紫志ほう海れとうこく舟れつゝてう乱しを
貫之はれいと蠣云のうせたまひ しほ舟見て
君なくて煙絶にし志ほかまのうらさひし
くも見えわたるかな 里まらは唐まて月八
あまとも秋のなかはゝし知るはれとう
とうんよみきみちのくよいれうりさん舟
あやし坐をしらきとあるく物語うけ
ままうにくも六十よこくれ中ましかやと
いふなまふ舟あるところなたわきりされハあむ
めのれされさうまちぬをめてこゝにかかまふ

いりうきにぎんとよばりける
世間小上を五尺ともせうちのくるまいれた
里こは業平にうきさらしれ人みくまめけお
も面ちなるへ〳〵浦代石巻ありまを
巻着のことくいなりへき歌
むしいきたかをこをまをくやすこ知すま
しきり山されのあれたにんか世といふかは家
あるきり糸きをのさくれ死さりみはその
文へうんかすは面しけりそのとれをきれむ
まのクんきりくんをつるてかすま

しりり
られたりのんこ動ム惟高文遠才一安法五位
上紀静子石虎水四品号小町家小町水まり波
を小りてのちふ小賀乃家と中太内馬代の
ム業平ありり
対よ面ちひきをあり下れはその人乃石
りとれ小きりりは新んこりふををきけを
のこりこつやまと哥水かれ里りいはう
をとちりさのいるれさのくそのねんりさく
りあちよれり法りその本代をふ知りね

てえさを出りてかさ〳〵みさてくるんをり
をみるにすきよみきりうまのうゑのりきく人の
よめれ
その人はなわすれ〳〵きり業平乃流度をう
ゑにふややまと哥を大和國は高に漢しあるり
所説は阿保親王はみるく四十〳〵あまりは
をめは濃度ふきはいてをりていふなるへし
世中はてをそうなわせい業のまくろ
はのとけうりあり
古今集ふをあはさは流ふて業平よりうより

乃くらう哥ハ金篇花に猟業乃方あり波川者
ふなれハ花いりのさうんと祐心ありをや
咲ぬきハをころふあるれていくの花に
ゆくはるへ里やハうの風ふんはい
うをしめち日をのはは名波とおうられ
皆樹乃あらゆへ者世上はゆ樹はをてなく
は表は心ハのとうふなるんといをり
とをんをみうりけうる及人はは奇
有常を平也
ちきは〳〵いくゝ樹ハをたきれうれ世り

何のひさうの屏風に
見ぬ業平はあの向うの
芋ほりてよりうせめてたなれハ色一ケ
迄といふ心ハ揚屋ようれのうへ
歌とへられうきせいハ盛者必衰ハ
を理とかうハ揚ふのりとしかせ
とそのホウとハうちかの方に日くれる
ありぬはともうの人さけをもて野もい
てきうはさけをのそてんとそよ紀とろ城
もめゆくふのまのうハとしふ面はいうぬ

ここうむまのうえ杉ほうきぬいふえこのの
しあひけうかくれをうりうあまの川のやとり
ふいうをとひふそうさみてさのつきんさ
せとれたまふれはのひまのうえんみてた
てまうりまうの
ここ丹右馬ハ場をさきまいふ業平敵とう
ありう
うう業ーたみをさ性めあやとうん天川原
う敵漬業ふりう
ちうのねしい七夕性めあくあきい日をうう

始めに七夕法めやうにて
ゆこ者とうけしく
元一給ひ乃あり
川きりそれつ也一
菊花酒一盃卒の也
沉酔一盃へふみや惟高はさ一の所哥
ロうくまりませいはゆりまふこと
ゆりきあり業平の哥をふく感一たぬい
くはうへ一あれ欲但又紀ふもよ
事也　梅花ちらはちらんちらんてあい

人乃きてをくうく　白雪乃絶たふ引
嵯ふたふ重あいふ　ゆりあり世ふとあ重たれ
ゆりあり名可出河一　御説清輔朝臣此高道
の事さ一也此逢着ありー　ゆりも宇治ふ
て河水久澄とりふ　ゆ毘とりて會乃家中
ゆりをくれて赤面ゆりて後　糸へ宇治
の橋ゆりあとくちんいくせゆりあり水此ふ
上ゆへゆ乃五文字をよくゆ　ゆりあり
されゆりとあり　桃心梅紀事也又王荊公
の黄花酒美宴食酒ゆ　ゆきあてあんー

てけりうりをにはへてそれを人ゐ乃をし
とて者ゝ乃とゝいふ沉思ゝ乃道理也法ゐれゐ
ひしーゝ乃ゝひゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃奥をさゝ海さし
く有常ゝ日色ゝ沈ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
一と世ゝ乃ゝひきまれきまてゝやとゝ乃ゝ人
をゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
せゝ乃ゝひこゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
へきれゝ乃ゝ人ゐは宮ゝとの乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
ゐやとゝ乃ゝこゝは乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
ゐ乃ゝ乃ゝて家ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
けのゝ物ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
乃ゝ乃ゝひゝんゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
と乃ゝ乃ゝゐの馬ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
ゐ乃ゝ乃ゝて家ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
の事ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
あゝ乃ゝなゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
ゐゝ乃ゝけゝゝいゝゝゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
古今十七乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
親王のいまちと乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃
山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ていれ行ふ所いはなとゝみていまわし
らへらす　くたらす
ゐこにのりりえてまつりてきれあり
おしなへて家をたいらあらなむ山のは
なくは月をいらしとゝ
後撰小はは上野峯雄とあり伝物語の後あり山
はをあきてとあひちひてよりり心は明也
愚見ハ家をたいらをおしみ山ま
色平地あ山ま
ひらかせよのよひたまひしられたかの
ことをいかりしふおすまれとまうま
乃名れをれはのうはは川まり日あるあ家は
うありまりをくりはてとくいんと
おりふ行はをきはいろをはちんとそは
うはまりまりこのむまのえあるをと
りて
ひりゐかせ平かまひたまふ初りの夏
也きいれりしめ月も物ますまみ
業平を浮供かめきろ也日こあへく家にう
ありはの後家りての家あり山をくりまく

とくいあんと申もの丹後見きたまひ縁た
ばをんとそ法のいさく日者をあらを戒説
ふ心ものとなる却ものふとりふ一向に無儀ありり
兵法いとばを法つ小さぬあり為ひ心まく
なるわてと法流に何とやらん常ものを我に
浄穢心此祈あり不霊志ら形ものを後やくて
法お家あるさやう此法を田食ら形無色
なるへ一
拙とそ苦ひきひとふ出とを中秋乃ものふ
このまれなくは

こまひ茶拙ひきむをふこくとを云へうう
以秋此秋ようかこの分れ今ハやひの法こと
里ゆり長雪一刻價子金四匁ハ称をしこあ
ひ法んとい為り秋此長秋さへある為此て
まて緒被ふきりといふありうこくねふ
茶引ひをふあいを法なをたうふの春此美の
ぬくや
とふ方きら附いやひ此つこりあり者りを
こおはとのこをらてありこまりふて分り
二月亟當三十日風光別秋若此身芸右今衆不

須臾未到曉鐘猶見夢と唐人の詩をおもひ出
てつくまり業平朝臣のひとりゐてなほ
をしとおもふあり
くしつまらて所のうまりきと思ひ
ハかりに法師おゝ法たまうてきり八
うゝつはめ山に弘法僧中きりと思ひ
のかの行幸一御おろす中惟高親王は
幼歟貞観十四年七月出家寛平九年二月廿日
薨惟喬文徳第一の御子みなれい儲君ゆゑ
如無位と世こ世ひとしく法和
ひきたゝ陸奥国の事と思ひ乃やう
なはいふあり
ひ月ゝ和ゝんとそまつるとそのにはうて
うゝ影ゝひえの山はふもとまれは言いとたの
しおゐてもむろは波うてゝおうゝてまは
ゆみつ遠くといと物かなすきておすま
しゝ行はやゝひさゝくゆつひて古れ事
なとおもひいくきちきりそをさうひて
しゝかと世ゝと世やはあとこともありき
まは元を如ちまてゆゝくれうゝ面ふとそ

そのほうくうに小野ハ大原ありあるか
ぶ屋ゆくあり〳〵まんとあるへ糸をゝ也摂津乃
細川乃小野ハ惟喬ハ住所歟有ハ宗祐説と
いへとも比叡乃山ハ
大原ハ杉くの小野ハ異端也凡しろをこなひ
ゝまゝ宮ゆり阿波乃国ハ
ゝまゝ而をも法宮といふ也寛平法皇の仁和
寺ゝまゝ而をを御室と中て今ハ中たて
まりゝ也つきしくとゝものいなしくて此詞
心象やめ而心をとつけしてゝ乃ハ
下乃事也而いひえれ山のふもとゆゑのた
めくゝりゝ所ゝ所ゝをゝ凡しろにこと
ゝ日ゝ月ゝまゝさゝ也心つきしくにあられある
へ〳〵大ゝこれ人ゝゝとゝあるへきにこの
をこ風流ゝゝ〳〵者の世をゝむきゝ法心
のゝゝさゝ世あるゝんゝ工夫〳〵て乃ゝへ
き而也ゝあ〳〵へれとゝを世ひいてゝ
水ゝ澄ゝとへつゝ〳〵ゝまりゝ〳〵の今ハ別
ゝ山居〳〵て書中ゝ所ゝ所ゝ
事ゝとゝゝゝく世ひつゝ而ゝ乃ゝ

しさてもはつうひてしのなとそのまゝを有
為紀のまゝとも業平を清和帝門へ侍へうて
はつうてもちてゆくを心ふかはうせ称ハ海
ふかりされとも名はおれあるまゝに書りれ
ようひてうあるう心あるれあり業平京ハ此所
を後くはかなゝ人海波やとあり作異逝世
るう業平をかのせんとてハ是侍とは所を
みうりといひはくへうるとは物語あり
忘きていあるゝ世おもふかりひきや雪ふる
けくるをうんとは

わすれていあるゝ世おもふかりひきやうふるゝと
ハ歌ゑすは位下侍従を天下をもちゝ
めし為紀右乃めは采居歌橘乃はは歌物を雪
ふるゝはけくれるてまつうんとは世をハうし
とあり 業平とを思れ名のゝやはふらん雪
をはあれとものゝ通海 業平とは思らん
うきせをなうむのさうりうんあるとやし
さ是惟喬のはは哥とゝ中此へうう新古今ゑ
へ道邊敷勅撰りは哥を入て和れし
ゆうされハひきいくゝをうゝうりまう

きゝやされしを何と思ひて此方へ物語
の後者れかゝるを葉平はなかてあるれ
ゆゑれへ思ふ事とくに
とそあんなるしく思ふ
ひとり出とこあり者り分はいやしなるた
いなん家あり者るそのあるなるをいふ而
ふをみたまひ者りみい家ふ家つ〳〵しきれ
ば後うれと思なれと思ふ〳〵えぬうてをいと
門こにさへ行りなれはいとうかしうした
まひ者り

業平のとこゝろうちあり心ふや此而業平の
自記と見てしり分ないやしなる女うん
家なり者り伊豆内親王の法事也みい家に
みやけのへ業平い朝夢り来云也ひとりこ
業平い兄弟五人なり阿保親王此子い出家
なれとも伊豆内親王法ろりい業平一子
ありし狀
さうに志ひりとれ事とて清物
をあるを母ところて見者はるとあり
とれ此あるこい意事也此乃家狀おとろき

て見まは者みのさはせちと仕頼ものにや
なりぬべきハさらぬもあるべきなりといへども
よくもまくやしきかぎりふ
ぬるもうれハ常のなりひえさかぬ道也
不詳也一きひ亦滅ハなくてふはされとも
むかまきわらるものまれぬ物にいよく
きまくやしきかいあり
物のみいさうらうたくよりう
勅云伊豆国親王貞観三年九月薨
世中すさらぬるもまれなくをうれる世とも

いのうち人のみれうめ八
我一分れうへをなけかりて世間へう
けくりふあり所をうとれうるもの
きりの一切衣生のみうれ物乃ためにより
んとも仕らみうれまきこもきう用連の我
女れたりの盂蘭盆を物きりをは同心ぬり
ひうり世さこありきうるらハうり仕かりまり
また見者ちうれ物たまうてきうむ用に
八のなりぬうてきうおはやはれをやつく
ようれはつのまは之ぬうてれされとも今

乃心うかとて毎うてきりてきりてのんのりきり
ひとしたうまりしんそくありせんし
なりあすしありあれまりてむ月すれひとく
ゑりとそ様をきたまひきりゆにあちんこ
とりてハ様をひしやまんみふ人ゑひて書
よりこめ様きりとりふと様すくゑ有りり
わらはより業平乃事とりふか不用惟喬王
かくまゝ毎をとゑしたりたうへやきりくあり
喬ふ業平ハ女りりり年まさ書ゑ俗ありせん
しありそくゑ俗人也せんしハ沙弥法師惟

なりられたのれたくれ法師ゑ
きく法師よりあり物ふやきと方ハ正用命
ハひきたりりひ様ゑ伝とる也
業平とき京をしきねをめりきね書の
つりり想状心あり
四つとりふ五文字ハ大明とみくハとり
うれぬのあり業をへとりくとふくゑ
儀あり源氏をゑつむ屋のりめふをおふ
ことなゑありりりりの寝りをく
きしといひてきり是りこのまくあり

くハれぬへきことなれハ首を
ひとすしかふ君のこゝろ
へのへさしとゝ
きとすしかふ心のまゝ事也
とよりなれはみこいくさうあられ
まふくはうねてゝ
別れ事申しけ
むりいとわるおとこ
ゆりなのくゝやゝ

さてやをりきりをこうへかりをり
形心さしきをけんとやすひきん出さこ
をみてやまりまる
なのくゝやゝなれはあやをれそれ
心ゆりの心さしてゝ
をしとなんといふ也
今まてにやをれぬ人の世をあ
なくをれいあ
ゆををしとのこ
こゝをとしてを

あらへし我ハわすれぬといふ儀ありと
そやうふきりはとこゝをあひうれきぬ京
ぢくゝ丹あんいくゝはきゝ
あひ元れぬ文ぢのへ可くれしとゝかか
し深殿二条右ぢとの間なめへし
ひゝおとこぢ代国むゝれあるりあやか
ぢゝふきるゝしていてをみきりむゝ代
ゝゝ
あゝのや業平の作和なるへしむゝの云に
あゝと古来見侯而きれ

芦乃やのかたれゝやきいくゝぬるをつけおを
くゝもさゝけさよゝりゝ
此ゝを書の云といふ但代哥新古今集第十七
雑歌中に業平のうゝと入ゝり是ハ業平の
作和あきハ細ゝ下ぬありされハ業平のゝ
よゝりゝをを代ゝなりめ代見ハ新
古今ハ撰ゝ代也撰者院殿りめてはんし
ゝされゝり書あるりハ哥とかゝぬる色に
むゝの哥とかくゝとゝるゝとゝみゝれとゝ云
道理ふあゝきりゝ業に志の海ちめう

四一ややきいてとはなくてきのをもて
とをみるくるみとかりられハ國郡在而以下
和遠也はうるとこころひらきもいやしき物
ハくなくなとそりあはくくんなとゆる事
をうれをいふあり
さくみけりうらのさとゆよをけりあるゑん
あ一やあるさとはいひきら
とよんきらきらのさゑまてさらして
後く後けふみくゐをきりてあくをんあり
やのあさとはいひきるとともちよりつは

うは説よりみきるきこのさとゆよきる
を後さうあるゑ也と私仁一也又説にとよ
見きるそと切ては里ともとかりあり私云
そこれはとをみけりあるをんあやれ
るさとはいひけり私曰をこをいふい物語乃
他者れうけふるのあれハうあとくをくく
道理ありあひふあり
「この世とこうはみやけのへしなれはそれを
たりみくゑふれをはけともあり。まりきみきり
あのあとこのうるのうんをゑふのうんありきり

そのいにしへ人のうたに里にあそびの
ぶきていさこれ山のうんふのありといふぬのひ
きれこれにてうりんといひてのうりてを
ふふそのたきものもりあとなりおのさ二十よ
ひろさ五よりあるいしれ葉てにちら
きねていにしへめらひやう丹あんありあ
ふきたきのうんふにらされ葉さきて
さいくくろいしあるをそのいしのうんふ
ちりぬるをわかよたれつねならむ有為の
さみくこやまれけきこなりんりされたきの

ちよはひのにはのうんふまもよむ
けはくこうあるこうしれは此石葉平
の自記とにてうりまのおしをはへなり
にしてあるなりふりの清和の内時
あやにふふのをけたれ和門殿兵衛佐和門殿也
常丹無りのうりうの男れこのうん行平ハ業
平れあふあまいりふりの行平を尼和門殿か
ふへ愚見在原行平貞観十四年八月廿五
日叙議ゆく物尼和門殿五十七同十五年殿と
はやめらはいさこのうをうりあるなり

の山うんとんこうまん人ゆり云諸道の男あり
説也いさいさそふ儀あり登仙山嘲漢朗白波
虎長能書　芦のやはいさこの山のそのかゝ
にのうりて力まいかぬ布引はたゝ滝そのゝ流ものよ
ゆ八しくあるゝと万物ゝ見をくきうりとゝ云
説もあまと体ゝ多細あるゝゝ初めゝ新絵
也御説ふたゝゝ人のゝ流といふ儀あり
なのさ世よひろさ五よ所ゝ流あり源線の
天台山賦小嶋やうなる見而ゝ巻ゝこゝ
らゝ文稗ゝあるゝ見ゝはゝ見わらぬた

圓座也せうのうしゝうゝ所きゝ所刻又
一神あり忘ふれゝまゝゝむ行平ゝ領也
我世ゝ月ゝふうのゝいゝゝまゝうひゝ波れたき
といつまたゝまん
あれからいのゝられゝふうのをゝいふは
あゝゝ在原氏ゝゝ流ゝゝて知ゝ
ひゝあゝて田今ゝゝうひなゝゝてをのむ
ゝゝ流ゝ流ゝ所下邪王命只越堺なゝ
まゝ所ゝゝるものゝあゝこゝゝるゝ邪中を
あゝその石をゝふのあゝゝまゝうむゝと

いかり袖うちかたのうちは間なり下句ハ世上ハ
用捨きわ歌乃源乃とも句をさりてこれとハ
違たのなんとも歌法講人ゆゑ——と也されど
もそれハ俗ゆゑきひ——き間なるこのを
心のうちゆゑをきまとく滝とゆゑ可強よ
——此説なり
あらし洗をふもむ
業平ゆり
ぬきみくるふ人ちあるらし——さりゆゑ乃ゆゑなく
ちりゆゑ神のせりたり

さりてをい程ゆ事也京内ゆをちらし何も
のやらん系篇ふ乃てけれ人と不知乃橋漬
るゆとふゆりて彩形と化て有つゆゆりを
ふ道をきりたにとあゆ家ゆ乃家ゆ書いされ人
の家なとそいひてゆめそのまへ乃く日れ
言多ゆなといふ物語の俗悟也徐孺宅前へ湖
水ゆなと妻中に見ゆれなとゆふ面白事
也ある——ハ業平也
陪西東乃量ゆ河色乃ゆ
ゆ東のゆ失ゆ

膽天丸星か又河邊の螢の我をむかへ乃あり
乃さく火をとかはり肖安そろこよの和し地
といつら五文字哥乃敍りしかはまりくらあ
まりかしなとといひてハ蜘なしさらこよ
乃和しかとといつる珠玉かはる五文字かはりい
さり火とは見えとも月の奇異なり雨をやめ
ひとそ和しこの川へ丸かくはらかあまのたゑ
火をとこうさむ見るなり此寄母かりし出得し
法説なし此歌の文字おほしいひ遣ること
けふかや我伯方丹とかはハ海人丸たく火哉

とをいふへしとかや伯しかはり宗祇この奇逗
又は河なりけるさらふの也とはかり秋風
乃吹上なりそて本白菊を花のあかねの浪丸
よまるか　芦丸やなし螢や波よふ海士やた
く抄ひとたひまよるハえをえつる
雲よみ文路なしかつりきねそのよみふを丸か
せふそでなさいてかたかし法とめそてその家のめ
乃ことをいそてうし見るの浪ほよ世路違ふ路
ひろひてい忍乃うらにまそさきぬ女かこよりそ
乃兄歌錢たの法きふまりてしをれ我抄得ひて

とまりしうらぶねはよあきち
家ゐかあるうらぬあしやの家也けとめては
雨の風なと吹あしうれ早朝也うきなるい
波にうもれてよりうれみる也見えぞいふ影
みく為家　よりやさ芦やれ里れ友れ日又
うきてよりてふを石いりりハ　此方乃南れ
風ゐうきなるのよるくをさしありの
やの里高土器ちうハ出ふて張ふや
ゐきけうれかさしふさんといとぬもゝ君う
あふはれしまけりきり

わかけ乃ハ海の惡石ゐいふ事をあるを又
海邪れ事ふいふ事をあるいとぬわ光
をるやうのをるるあり海邪のかさるく秘
蔭をるをふをとも今日初のまれ人ふはおし
海ふうと地おりしもあをいま此藻を風の
ふきよせうハ君に海いうせんうあり
また門うをのゝさしふさをう白ふ乃波を
てゆへふのいちしふ山と河り是ハ波をか
きしとゆあり
ゐ中人乃ふ乃ふくハあ月まりやうしけや

是心伊勢う初也あらやすれハ中人とハ
思判るる詞也物ハ有餘不足つあるもの
あり世ハ方ハいろとあり双ル地ハくわうひ
ふう新心ハり
昔ハとうきふはあるぬられるもたらを
をあ月まりて月を見くそれうみるてひとり
中年ハかうり中年に也ハうなうちやそれ
う中ふひとうハ葉年也
おハかさい月をめそ一られうあはれ
はハ人乃地ひとあるうものの

はハ豆文字ハ心ハ陸地ハ也十の物七八と
いふ心ハり月を作しく貪着るる心ハりよむ
るる花ふくを葉みくを又人乃上ハそ者着
相ありていいくとありされハそのゆへよ
思分と換るる物也思るれハあるぬとハふ
ハりにうたかとゆれてものこ分別なとも
いくそて若是ハ一きいふ心ハり濃てと
ぬる哥也月ふをあ物ハ貪一てうれあり
きまう分をまりうれ常とを観せをし
て也なし色ハ生滅とうりくくを作あて

もとめありけるにさのみはめてしといふ也
月をものを文字にしるしたるをけくへしと白
樂天遊内侍蒔月明眞思往事損去顔色減去
年 はりそふおひぬるあるともいとてなは
君れうへあの月をもんさうん
ひとりいやしうしぬはとこわきしりはまさ
里うれ人をまひうけてとへきう
れともなしやとうれ人なるへしと
人をまれうひしれをあらきたくいま
きの神なれおもはせん

れうひうれ形ひゆへ下ひしかは何
うれ神のくに里みくにうれをと称するれ
ふ様やおあきんとあるりさてしくそをゆ
へうしそ恋しぬまきとのこらふ心的り
ひりつまうれ人をいうそと申ひとうあ
きはあれとや思ひきんさうあるものこし
みくりをいありきうをのきりうくうきしくみ
うこりうなはおすろうりけうさく
所りつあく
つまうれ人なひきかうれ人あり

撫花ふ[illegible]ちくいふ[illegible]ふらめあるされみ[illegible]
たあれのあ[illegible]
あくあ[illegible]んといへともの[illegible]かさ[illegible]也
それ[illegible]ふ[illegible]かくさ[illegible]にみかへのをい
[illegible]ふこと[illegible]ひといふ也あれよの
[illegible]是を愚見ふはあ[illegible]れ[illegible]如と有
れと不信用ふ[illegible]説あり
といふ心をあらふ[illegible]
ふちとものめ[illegible]をのこ[illegible]きとかふ
心をあるへし上を五尺[illegible]伊勢ら詞あり

推量志ふ[illegible]ら
ひ[illegible]月日れ行をさへ[illegible]ひ[illegible]月ほこ[illegible]
[illegible]かさ[illegible]
あ[illegible]くといふはあ[illegible]心ゆり人生は[illegible]
くにして月日ら[illegible]を[illegible]ふの
[illegible]ふゆへまたし[illegible]ゆ[illegible]也[illegible]
その人[illegible]この月も又あ[illegible]と月日
のを[illegible]ふなりその人[illegible]あ[illegible]ん
くと月日ゆくさへ[illegible]ふ[illegible]とあり
[illegible]しめ[illegible]の[illegible]の[illegible]の日れ[illegible]

さへなりにけるかな

後撰集二よみ人しらずとあり定家の心ハ略也
うら太かさはすくる月日さへあかぬ恋に二
義ありハまりてそふにおよひ又夕暮にさへな
思ひ乱れよと也おもふ人にあひかたくしていつ流
らずしをくる月日ハおしけれハへ－ゆふか
くれずしさハなりけりきみのなとゝいふかる不
大切也太乃詞ゑきの二月代流こゝらといふ
舟に我つあり見まはは別してあはれ深らん
所なり

むかしひ－さにきつゝなくまどを女舟せう
うこをたまえをくよみ歌の
せう捜こをしふかりのゝをえいぬ葉あり
へ－－
芦ハこゝをたれにし－を舟いそとひゆれすへ
ふらんみる人をなし
万葉はたゝゝ－－小舟とありちいさき舟也
今すぐ桜きみがみを残たれつけといふ小舟
ハあれの中へこれ入ならハよそへは見ては
我おりふ人乃あふりへゆれかくりく　玉葉

とも人のおもひきるハあめへこくまうすなり
さみはかといふやあやめ給也ありけるこそれ
かさしを舟とはつ乗りわたし人にや恋
まうさるらん
もとし世とこ身いはいやしくていとも人なれ人
なを思ひけありけりをこしけるのをね乗は
さ海にや沢りきんぬしてこそ思ひにそ思ひ
おもひまもひくよめる
身はいやしくて藁平の早下なりにける人
才一なる人なりをこしその乗ね乗は一向

にされとそれまねやうなりいよしく人清く
しなるさ後なり
あふさく思ひいまさへしなそへなくたるは
いやしきくらしらりきり
言福は世にはあふなくと数をさせりたとひ
定家は自筆にはせられともしやうとれは後人の
さは事をあるへきなれは必数を信をへきに
あらはまれあふなくとよみきこえまり念仏
なる心那りなそへなり乗篤とい云儀なりこ
ひかり思ひりはへしとひられたるはい

やーきをれそくなくらしきあり
世中うたがきいやーきおそくなくれど
あり世ありなるひあり山姫れこれを
うをれをなくかくひとりれそあめ四方れ
みちて
ひとをあれ事は世のあとりあり山やあり
なん
今の世をくあきいあとやと泊きり

閑疑抄巻第五

ひとり世とこゆりくりいりいりかんそのお
ところをまんならにくりのちりあるとこあるけ
きとみあるなりかりれはこあるふそある
物とはしくりのひとをせきりれるとを
くんありくれはくれにやきりきりをいまれ
れくれのすとてひとはふけりをあせきり
きりのれとこいくりをそのうきこあふ要
をハ今まてくありのハこくりとれへ形
人をはくくれ面白のあんありけりとて

国立公文書館
National Archives of Japan

ろうしてみてやまうきん時は秋ずうん
ありけり
そのおとこ是は成て成てきり業平の女房離
別をうみり後に早くこのりきれ世他人ず
嫁をれうも如れ腹れ乃みりあきはまへのおと
これかくこへとをれくいひはすせ女かとあ
忘かく人ふきは忘をうれてといふありそれ
男乃心をあり百花事ありと拓ありうし
ては我忘とりうしての儀也漏の字きさ禅
問法流ふは嘲罵の罵字と見うる為ありうさけ
ひとく猿て居りあり女説何ふくをと法説ありり
但法説中法まて八漏してとあり只漏し
てと為若してりうへしといふ
秋れよい表日忘ふりのあきや雨ふ雨やらへ
はうれらん
秋をはそれ世とこふたまく表を法ずくの男
にたをうの業也秋乃表日を忘ふく也當季
よ心乃うりふゆへ也表ハ表ハ秋乃りの也
雨ーー雨やまきうんといふ秋ありを今の秋
とこをはうてありうへハふ重也

花をめてんよめりける女の色し
ちらし思秋ひとりけれも時にむつるゝめやまみちを
ことふかき達
秋はあはれを世にもしれは春にはあはれにふまき
とまりされとをよくしらかくりておもへハ
男の心ろハいつまでもあかぬものゝ世花を
まみちもともみちらなれハさうに世界の変
にん程はなんまろ事にくハ奉也けり子
かう思ひさとはあさひやとありけり
むかし二条后につかうまつるおとこ有けり

女のつかうまつるをつねにみかはしてよはひ
わたりけりいかてものこしにたいめんし
ておほつかなく思ひつめたる事すこし
はるけんといひけれは女いとしのひて
ものこしにあひにけり物かたりなとして
おとこ
二条后に仕うまつりけるとこ業平也前よ
を載こゝろえあるへく忠仁公の家礼也后又めひ
にておはしませは心やすくしつかうまつり家
也仕うまつる男女二条后に仕うまつるさまめし川

うたゝくれば也はつひはめるあをんり日
比つゝなりひ也
夜星ゝ恋は海さりぬ銀河へたつゝ世きをいは
そやめてよ
ゝのゝさてめてゝあひよきり
七夕いとふまれあらきりふまとまそのの
ふたゝひあふりの也秋中いりのこ
ゝきは夜やしゝみまきりてかなゝきたり
七夕みはをとゝ也今はへたつゝ世ゝ秋やあ
てゝあゝれりなゝりは夜なめてゝあひゝ

ゝり男女は中をもやりゝゝいゝ夜のりとゝ
事ゝの事ゝなゝへゝ
ひゝゝはゝこゝりゝゝ秋とりくいふ夜月
ロへゝきりいゝ水に一あゝ秋ふゝゝゝを
ふゝゝとや男ひきんやゝゝくあゝれとなひ
きりそのこゝろみふ月乃をちりゝりゝれは
ふ月ふゝさひゝりふゝ月いそゝふきゝ世いひ
とゝせゝゝ今ふなふはゝゝをなゝ月ゝ
ゝゝもひゝりふゝりいくゝゝ時をいゝあ月七
すゝゝ秋風ふきゝゝんゝ紀ゝなゝ秋あゝ

むとの事ありきれ此ことのとひてあるう
こゝろその人のもとにへいあんをあるとそくせ
ちいてきにきりさらるれはけせのせうとにハ
四ふむのへにきしうわされいけかうえてれる
ゝみちをひろハせくうをとみてうきつけく
をこせうう

岩本ふ一あう祿は人非本石心有情見が月
のをらうう悪鬼丹六月寸お日ゆあをを也
至くう六月中旬也分丹ゆうさもひとりぬ方
いてさにを至六月中旬突氣代時分丹もくう

一を時昔を鶴あうぬ事ゝ丹あをきいひのへ
むうあかかさういてきうをと作病をうあり
その人のうくふいうんをあうとそくせちい
てうふきう業平れうをへゆうんをううとに
舌ゝそうう也されハせれをとひとをむう
ひを為う也うえてのをりゝみちを新せん時
ふにあうにされうをもやくを付もあうのの
されはさをあうへ一
れうけていひ一なうをあうくにれえ
あう一をはうそありきれ

秋風さいはいなくなりぬあもんとちまりつる
ものをたをりとりたるふいてとつりて歳あり
木のもとにしくえんそいはいのもとにたち
つりしかはあるあるものもそのまくを
目をとりをはりよせてゆふまり
をうたをたてしこしりんをこせいられとや
をとていねさてやうてのちはぬみたふまてを
らんよくてやあらんあくてやあらんあり
ぬをとりに
上の例ありをうたつあるをこせいりと有

て叫こしりんをこせいられとやをきといふ
貴人相遇やうなりられともをてそのまく
御ふ法あるに手つあるををてたりあり
ハ御をといひをきるをそれをいまをこせた
ふといふなりをてやうそのちをふまてをり
すといふハいひ様こをせられをまてハをり
にといふなをへしに世巻法あるものやく
ふ様つけてをるハしくてやあらんあり
くてやあらんいあり而ををらん業平のみの
物ををるを孫ハよれをさ海やらんありをさ海

やらんかうれ石ゐれ屋ゐん行末我ゐう
ねいさうけいさいふうう
ものはとこはあれさいて我うちてうんろう
ひさうあうしうけけのき事人れのろひしくい
おふものゐやあうんたうねうものゐやあうんい
まうそはんめと楚いふなう
海ちのさうてれとう我愚見抄ゐはあまのさ
うてうはんを呪詛ゐる事をいふ地祇第四
代彦火々出見尊とや祇のうの名火闌降命
とや出はまゐきうは二祇さうくをた

まふとれこのけうりうをうなひたまひし
をそれう魚したへ竺我さうなるせめ
たまひしうはりやとうれわうりをた
つひありきうあひしとれたわつうをの我
されといふ祇のうりてうをのうて
家へいりうあひてやうくつまうりを弱竺
りてあれみうとふうへりまふとき
海祇乃をりへみうりてうあくれうくく
りき事うりをと楚ひつけくうりうを
みくををあけあうさへたまひりまとあり

国立公文書館
National Archives of Japan

是りく日本記第二乃面てうりかい
ふ事れれらうちまりて人数のろふ
とそハまをうしるへ所りてくを事有
とやそれをあものさそて引とはいふ也
宣部にもくれこと神ちてなあ所方をの
也のくあまものさそをうりうへすりちし
く本のに仏さふをなしといふ引所まてあ
地に書り出説ハは太乃とをりさもありねへ
を事也されとも和傳の説を海古の引き
ををりと書海りこへさう海りありてゆ

をとそをみくなくをらていふなりいをも
つきあくくろしを神也業平の物ひれ
切ものあものさそをうらてらいるあ
そあくへくくにくろしきいふ也
六百番哥合ていに後撰れあまの出よりもへ
き事所象とまくるへ所をて作りされハも
とくり異儀をある次のふといふ方ハ也
しるきれとをあまのさをてをう引りさハ
いれりひそりめてものをう方丹不法然ゆ
法けきハおそ所りきといふ心ものり業平の

我のろひ事とかきとりあつめたるなり
不あくものの心はおちてゆくすゑもも
やわらんと思ひてていふうりは物語い狂言
みいやゝきこと物とも書入されども詞
花云葉或歌といへきはうらの色くさよみく歌
こゝろ紙付へうりは他人の石ねゝ書
ふ面白の藝ひくゝ愚見ゝらの字をい
たされうは儀にたよりくゝひくつけ男
なといふやうゝれうゝきといひくゝ
うゝ面白の

ひゝうりうゝ小ゝ指ひ面ゝうゝ書とやいま
きゝうりきゝ四十賀九条の影ゝてきゝ書きゝ日
中將なりけゝ前

勅物云日宣云基經貞觀十四年八月廿一日右
大臣右大將世一貞觀十七年四十歳業平十九
年正十五任中將天慶四十賀堀川右大臣影九
条ゝ河ゝ四十賀八貞觀十七年中將ゝ河業
平八末中將ゝ任ゝ後に極官とかけゝ
面ゝ

櫻花ちりうむくゝれおひらくれこんといふ

ふみちらしたるを
古今集東七賀の哥にて
きこえたるなりて
遠今光の東屋紀道貫
うみといふものの字
たゞくよりり俊成宗
ふうれりろさと評せ
むりはきはひまう
りりりりうまる
むめのはくまえた

つゝとて
太政大臣忠仁公也勅撰云忠仁公天安元年
二月十九日大政大臣五十五四月九日従一位
二年十一月摂政清和即位 同二年清和天皇
九歳ゆく位子 作りせたまふ紀摂政
うは為ゆうくて貞観十四年九月二日薨六十
五堀川太政大臣ゆ又藤原朝臣
中也忠仁公諡号也 つ町ま
つゝ北とこ業平忠仁公の歌礼ゆきはいふ
我ものひ君のしあみと知り花小時一毛ち

ぬるのようなりきら
ゝ枝をよりて今をの月八橘のあら海氏時分
ゝあらしされもを きゝ毛ゝ毛ゝ毛

里大家代りこハ去迎それより来ハ花迎也小
賀のゝちハ去迎ゆゑ毎年五月小あるてつ
ゝむまを法ゝむとそ花右近和ゝ二ゝひるま
のりて万い家業也三月ハ花迎れあるて法
ゝひ四月ハ去迎れあるてつゝむ五月ハ花迎
乃波を法ゝひ六月ハ去近のまて法ゝむあり
是をひ物れ日といひハ波を門ゝひの時合
人ゝも褐をひきれりてゝゝにひありと
いふありあるを法ゝひ同神ゝまゝこそれハ
そと儀ゝ物ゝ者れハまをつゝひとひあり

といふ賀茂の見法ハそをして競馬ハしき
ちやうと用ゝとゝ場所ゝ場所ゝ花右近のる
場ゝ物ゝやとそて近和中ゝ将の若殿ゝ
而ゝ業平物ゝやに門さそれゝゝの車
れゝ下をれゝ門ゝ我見ゝ小や位それ
ハ祝をくてゝをみ西へゝ法又ゝをみ
ゝハ法ゝとゝをいゝと海ゆゝへ大和
絵猫小ハその日中将見物ゝいゝゝゝ
見ゝゝとあそそ世里人
見ゝをあゝ見ゝ世ねあ人のゝひ一見ハあや

なくらふやのうちくらさん
古と集才十一恵哥一よ入うち初歩ハ太近乃
ひ可元れひ歩り乃日ひ元ひ可ようそうけ
ふ車れ下をされうりゆ乃ろ和のの可ふ及
元れれハよみてけつ可りきう在原乃業平朝
臣とけり乃心ハ可ふみうふりうふ
きとそのんをけとれかきれハあやなく
うふやおうめくうさんとありあやなくはか
ひうくまとやをなれをといふ儀也 万て
の色くあやなく花をおしむふいけらは

後乃春ものハま
くー
ちるうちねなふっあやなくわそていうん男ひ
のくうそうへありなれ
是を古今十一て入うち漢人ちうけの方と
けりうて心ハ知とをちうけをいふ色に
とな　うひちけくうおひのうそ志ふ
色ゆきといふ大和物語ハ此方ハ遠をう
見をうけをれと知て志らふ井けの
なれなふのおうめやとありされともすて

小古今ものがたりぬれば所をへだてはさまにおよぶへらすべしとはのらるれば是もりの丹書にもの
のらるるあひだ
ひとつ井とこ場涼殿はたとえば殿上人なれば
あるやむごとなき人れば
さをものふ草とやいふとそいとさせ給殿
なれば殿ばかりて
清涼殿はうるふの方あるまた後涼殿也
号を清涼殿とよめども後涼殿とみ付ら

れば殿ばかりのあひだやんごとなきあれば
殿なれとも本ー志茂草をもたふどやいふと
て業平の通家不ふやかぬ心い業平の通し
あるとをや志ねらんされこもなれ恐ふより
ふていりてこたえんといひけ
たるあり丹茂の事義載堂書ー趣ーて
書ーり丹茂草志草問答や檜木代義ふふ義と
号ーれ清といひひとり義ふ丹義ふ志草
と常にいふなりされ号さのう草乃かさち
なとをうしてきんなーたく一茂二名也

はかにして打くべきと有　上をうこと是ふ
を用し故に乃ち打れ菓の名をつけられは
哥一首二名ときらうは説にくいあり
うち目を菓といひてをうしうを
わすれをさあふのへは乃ちらめとこれ君
ふありのらをそのまん
うあるふはわすれをものふとやこた
あんといふありこをいはをのいせ
いわを菓ふはあられいものふまあり
後をなしものんといきり

ひ一花兵和尚ありけるありつのいれ
といふありきそのあんれ部よれそけり
ときてうへ一ありける花中弁弁ぬちつ
のはさらといふをあんぬうとそ〇ふくそ
乃用ハあり一すうきうけるかさけあり
人ふてかめふ花をさきうそのそれのなって
あやーきふちつそれのうきそれれしない
三尺出すりうんあるきそれをたいふく
もふそてのこふあるーのつうあり
あふーをいうのふとてきそれハう

えてよめせきるまくより所れられとはさらさら
なれはをまひられと志めてしめせられはかく
うん
行平業平乃兄なり海さらの勅云菊原良近貞
観十二年正月六日中弁十六年時宗中弁二代
寛永弟丹七小傳あり弟祇伯従五位下義濃權
守貞観十七年九月九日卒父太宰權帥正三位
吉嘉才四男也傳別在之学文をとはなりわし
めとも容義をくきて政乃道をしるふ
人と也上戸なくて大きらいなりしせめり花
の志なひ菊はされ花ふさをりふ也
催馬樂をきかはしを見まはしかり柳
ふいとをもいふなりめへしうえ
男成愚見は治平雲客ふりしは時宗
毎上首ふくあるを書ふりとありうえ
ありけりともいふへしに上にあらみく改道
はかりさへ辯ありて是森人ありまさら
うむをあのりて重如ともこありしせ
まらうとさ客人乃器也ありしまう者行
平は饗儲なりある事のうう業平ありり

ありしまう面行平の饗應ときく也云ふ
なるべきもの花ハきまひきれとなると此道
業平の自詠と見て[illegible]
咲花の色とりくに[illegible]人を恨る有りに
まさる萩のうけかを[illegible]
萩家の忠仁公乃栄花一つ[illegible]
日ハ花びら萩ハ下うけ色見て有りに
海さう宮の池ハ[illegible]
なとかくしもよむひとのなれは[illegible]
とのゐくハれさうにて萩ハ[illegible]

事にさうのけをなりてうあれとうんい
ひけるみふひと拙しらんありよきりは方
れ[illegible]ねと會席の[illegible]
すといふハ此哥[illegible]
といふあり
ひとりはくこのりきんりうさハよりなれと
世中を捨ひとりさハよりきりあとのうなのの
丹なりて世中を捨ひうんしてゑをあり
すとうのなりやまはとうをみきりとと忘て
をなりなれはうみてゑりけり

あらとをりてありぬ所をよまん人ハ有為之
常をもつ世のもとゝりを勤并して教誡
乃ちともありて下れ治をいてゝ風俗こ
世をあり古今の序ハ以紀とゝいきるものの
きゝ奇をよ後ハりをとかきり人倫うて
ハ礼法道理をきゝさらへなんやされハ人ハ
あゝ万徳世ともゝるゝ所ハ天地ゝこ如と滋乃ゝ風俗ゝ
ハ和の道仁義礼智信をゝくはきまへきゝ也哥
き也哥をよむ人なれハ如此道理を知風俗と

いふ心ゝ奇ハよ後ゝれとも世の事ゝ
をゝる人といふゝ所ゝとしをくハ親族ゝ
ゝとゝ紀也ゝくハ旧世他人ゝくをゝ紀ゝ
ハ心ゝを西てよみて所ゝ也次所家世ゝ
ゝゝきゝゝとゝあひよてまつり中ゝれハ
親族ゝ

抜むゝとて雲ハの産ゝ物ゝ者ゝとのうきこ
ゝ世ゝ世ゝてゝゝてゝ
あゝにゝりて世をゝむゝとゝを雲風にのゝ
てゝう世世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まことの道心さとりに入りてをまろく
ハ可法法事也けるは世ゝまれて位
やうまハあらへとうけとひやゐ也家の
世俗のあれ生まふをうりやんくいひやゐ
ふへし
ぜをんいひ取りまろ妖家の妄也
月空は色ハ伊勢の云義ありとあり
ひとり出てこゝろりをいとぬめふ志ちように
てあるとあるとろなるわきりぬくきれをり
とにをんけのうまりはけ心あやまりやをく
ヨきをんをこゝろ式つるひたまひきろ人をあひ
いあるりをりて
出世を業平也ものあり志ちようぬめを源氏
をおなす事をかさひくまきり別天志く
いあるり文選ひかとちまみめとく実あろ人
といふあるくくしき人ふくはあれ也ふり
業平法門仁明天皇をやさてまいろ崩御乃後
山城淀業平をされりたさめてまるる
ちりていふ也心あやありやをさをなんまん
丹宮寺といふ所に心あやまりやとかきを

見こそ愚見なれ仁明帝の文徳光孝安皇
なとをゝとのうれもいつまのみこゝく
色のりぬへし
称めうりの義をもうなまとろあいやこう
かもありはさうふ
古今集末十三ゝ入こうの心わ称めうよ
の義とは一般そと人ゝあひ〻ゝとゝ
いつもうそのかのふ見うわれもこ
きりたにまこと代義ふをうらんとゝとと
ろあいやとうなれ事のまさうとあらい
やハ除うり
とうんうみて所りけうされ方れきこあけさよ
業平れ自記とりてこうり徳退此無とあるこう
ろあり愚見ハきこあけさよハこう徳きた
るれといふをりとあをりこうり徳説此花
やうふをなれ所世なんうり実ハあまとを古哥れ
歌玄みとるれをりのなれ〻
ひうまとなうまとなくてあまふ歌思人有
きりかうとをやつ〻れいものやゆう〻い
思ぎんかりのまりれていくうをきうを思

所よりて所ろ

あるものゝ心は何程迄細かりて形ひ有

物あるとされハなふのいそれもなくてあは

みあるは真実の道心といふありかたさ我や

川しされとものやゆゆしうさちをや

つしなとをろ人の見物をといさめるふ

心なりかをり

世をうたのあはとし人をたろうにめくをせ

よしをとのまろさ哉

あまを海人うりをせてよりありめとは海人し

うりのすれハめくをせよといをり世をう

しとそあはにみれろ人とをくりたにめを

をせしをくるあをせよとなりめををせハ

用と用とゆあをせて所ハをろ心ありさやう

かをのむなり安方ゆあをせて同心あをて

はをねをり

されを秋家乃ものの見たをまひけりくろ海かをく

きををくりなれはんををてのりをうをひて

をりとをん

をりしく世思ひてをををてうをりををの

なゐへ
ひとりはとこかくてはこねへしとひとり
うちなれば
白露はけふをのあらむ法すとて夜にねをへ
さ人をあらしを
あら野はさしはきえんとまもまくよとあり露
いもものやうにて凡夫事ふまとものを法
理ぬく人をあらまきそとあり
をいかりなれはいとかりとおもひなれと心
さしいやはさらにきり

なめりい河海にて輕日本記に孔雀よひあれ
人殘業平のおもひけるなる殘すて元
ぬはひんなきれこもあるあるいやまり
身あるとあらむくあらくよといひきる
まとは說て白露はいきふもけなひとと云
あまりてあれ小はおもへるもんさいい
やはに殘と乃ら面白あるりと新伯
ひとりはとこみこそ乃世乃元うたまふ
不はなうてさきさ川のかとりはく
ちとやあら神代色きあときさ川うくれし

特に名をとゝめ
古今東西人々の詞花を二条院后宮の
と屏風に中書の時
みちのくのかしこきを見ぬくるあ
歌の歌をのがれてゆきまゝみぬとみはる
柳の浪やうん　ちちやうの神代をき
こえたるはうくれなゐ水をくゝと
ハめはせいかゝ奇なるものせうこの
絵はハ清みちの世うえ一ふまを
ちゝまうてゝ立田川にもみくゝるあれ

とありいつまでうはあらんと思見物に有
夢細の清勘ゝ清勘ゝ
ハ世ゝ川にいつてを當主を後ゝ
いふ所ゝ而の拾地なと俳諧を
為しゝて寄れ心ハ尚主那那の所ゝ葉平
乃ゝ所ゝ所而なし世ゝ川ゝ
ちれちゝくゝなのちゝ尚主をい
ひゝて神代ゝ神代ゝ要ハありとゝ
みゝゝあるといふ事をきゝ
はをハ程ある事ゝ

て云俗道の所也　みよしのゝたきの河内
は芸風下神代と業うぬ花うゑおきう
ひとりあてあり所とこゝ所りをりその井とこれ
ゝくなりけゝ人を内証ふありをうふちりの
ゝゆゑとゆゑ人よりひりりされとまこゝ
なれ小ゝをおさくくしうりはあとをもい
ひゝうはいんや所ハよはりなはこゝの
ふしあゝ人あんゝうきてかゝをゝ所りなり
めて海ゝひにきりさて男のよりゝ
あてゝ所ゝとこ業平也その男ゝをゝたけ

男女業平乃妹なりゝ所業の也ゝ人ゝ
敏行女名虎の女貞観九小内記十二年任大内
記能弁ゝくゝ一切経一巻ゝ所ゝ
男人ゝ所ゝ所ゝ後撰巻頭の所ゝ作者也
又色ゝくゝ女ゝ矢色ゝ長ゝ
さくくハ優也治也長也和さくくゝ
女ゝ業平ゝ優ゝ所ゝ心所ゝ
ゝゝハゝ細ゝ所ゝ文のゝ艶書ゝ
とのうゝくゝゝゝ所ゝ
ゝ所ゝ所ゝ業ゝ也ゝ所ゝ

よ後さうふはあんらくよりあねといふあり
へーあんと書て飯はいをかしたるよみあり
ハあり きさらぎ紙より出せてハ只井とさんと田
ひて業平乃文はとゝ業あんをかきそうあり む
ゝ此人乃さう後也業平は祢よりけよりあるわ
ゝ まとゝいふゝさを後て妹かけさうしゝ
なとゝいふはあり きゝ説也さうの事ハ乃阪
ふくゝきあらゝ妹をとくゝ見うあ事
と乃ゝ西紀也
つまゝくのうあに此ゝ源川紐のゝひらて

あふゝ也なゝ
古今第十五恋哥也時物語ゝ業平朝臣の歌
ふ物語ゝ女のゝゝ第てゝゝ
ゝしゝの朝臣と河りゝゝの心ふつまゝく
とゝてあきハ古事をもおもひ
所此事ゝ紙ゝふとゝりゝゝと者さゝゝ変
河りて絶間をとくゝゝゝゝゝゝ
くゝ女乃ゝゝ紙ゝふゝゝ也
ゝゝ きいゝ乃ゝゝゝゝゝゝ
濃ゝゝ雑ふひゝゝ源川乃ゝふゝゝゝ

ハ八のまん

このうきれ詞也てしのみすみりてゑ

十丹よりあれ業平朝臣とあり可のんハの

さゝなれいよう神のをひちていあをゆき志

川たなっ多るなとあるいせものうのまんと

いありられらゑ乃歌上といふへ十神の

みひつりといふをあるあれこしとうう

へゝ童をいひうらゑ也源氏養の屋ゆを六条

市恩ゆ神あるゝ也ひちとりいゝ志りゆの

らゆりきるゝこのうりりそうき　滋に

や人はゆりゝ我方ハ多もうゆりまてふう

き恋ゆを此ゆ類也

ていあ色りられ井とこいていさうめてゝいは

まそはゑてふゝこゆいゝきてありとゆんいふ成

ゆとこふゝおこせうりえそのられ事ゆりゆ

ヨあめのゆりゆ色ゆにゆんみをつひ位んさ

いをひあるハこゆあはゆゝいありを

きゆきいれゆとこをんゆりてみて

やらん

まゝてふゝこゆ入て秘義ゝあるんゆ

世をこゝろにたくせしうちも難心ゆゑ初菜
の為敵なりのうち絶ふ一て後の事なり
なりをはゝ別て忍ぶと業者ハ源をなる
也されとゞきつゝはけれハ同源なれ一
と法説也さいうひ分事あるも也
数くゝ形ひ形をひとつひかゝを分をなる
面ハ後世まされ忍
此方古今発才四てへうり初中ハ萩原乃と
一行朝臣の業平の歌なりけりとあひも
四ゝ文つゝひ中きうに繁ハ今まうてい

雨れ乃世ん是つゝひ待ひ物
ひうを世てうのハ
れ業平の信ゝ奇の心ハ後ゝ
を世ゝ
ひうの法心ゝ
ハ
ハ
ハ

て志ゆくすゑのまもりとなるべきものなれば
世ゝを乃ちうあるべきねがひてきこゆる神たち
ゝとかいひたしくとわらべも仝業連奇に
あめ小雨ふきしをとりてをふたりにたり
かさゝ差ばうのいまゝやかしくしく
むりなひとめの人成ちらてらしく
風ふけどもえまなくこれいはあまやゝ我故なし
のくゝ時なれ
とをうりとをかみといふんもとをのかれ
字濁てるむ多り風しはあはいは浪こゝ岩間

もくく風ゆゝはゝ波もたゝく浪のくゝぬおりを
なく業伯風波まめらは雨ゝ神ゝりといをり
とつはれくくまゝ小ゝ考ゝ成くゝ出ひけり
出とこ
業平乃女の常ゝ此くくさゝいの出業を
外のうへよひさゝはてくくかりけ
業ゝ出おくようゝ乃あまくゝ田水は水ゝ
これゝいゝ小ゝとゝ
よひおくよい業乃間のくゝふゝ
にといふ世ゝりよゝ出ゝ蛙ゝ雨をゝひて

なくあり出たりてなくと記ハ面はゝ
も面てあるのまさらやうゝ出はゆゝ
なりけれきさしはりして水のはゝ
おるるさの、まひはりをまさの袖ハ波うて
すといふ也をみたの出ひとりあくハな
ゝといふ儀あり又一儀ハ出はれ出ゝ
ゝおくさくあまるれ男波ハよりたりに
それはりさくさ物なるの衣ハのうゝと記か
きも水はそまされとは物なるの四ひはさ
ふといふ也爰ハ物こるゆくれ四

ひはあれひとり儀也
ひはりおくことをさらの人をうゝなゝ
とに爰りきゝ
業平朝臣也女母をくれる新人歌
花はりを人をそあるさ母歌母なれいまを記
母ひひそのあり
古今集第十六哀傷の云也作者紀貫行とあり
動ハ友則あるあくハ業平朝臣と記也
可の心ハ花はりを人ハ成あるにあり
花をされりこひんゝを人をさきゝ

むさもしかりし
ものおもひのある事
ありといふ事
ひとり井とこみきりふかきあやまりなれ
ども井とこみきりとなひゆめみるんとたまひつる
といふ事なれは井とこみきりこ
思ひあまりいとふかしまたなんぞの
ものゝ見えはこゝひとひせる
妻はこゝのこゝはしぬれ通りよりてゐ
ゆゝしきものとこひしくおもふみちりて
我魂こそ行つゝめ物ふるくいひをいは

とめなとせ大れ魂ゆゝ我乃くいおひをひ
ふとてまりなる事あり愚見抄に見はん
こゝはのそつくしくハ　玉ハゝ自ハれと
色ゝねとも心をひろをひろくへ乃ハ
はと心所をこゝ通して袖れるこの所
まを心をふ事とひをひをくへた
ふ事ありそのこゝ紙ひて歌ふかく
ものゝのふくんを玉ハ我こゝはみくそあるら
むつまふ心をひ給へとせめてれるよみ
て所ゝ所ゝとのそハ所ゝ流下　あの之

夏の神の守りやへよぎん銀五匁のお
きんらをるるに女のまくにうくみ
ひろ出さこやんあをるに女のまくにうくみ
夏の神をとりふらふやうみていひ取りけり
人れなくありるるをぬすみぬすみ
やるあり
古やゆりもやしなんん今をるる海を見ぬ人を
こうるものとは
ひろ出ハゆりし事取りんあれ事やらん
をるはまをぬ人をこうるといふ
あをいゆ
ゆりなし銀をめ
う魚し
下ひのをるをとけなくにゆこる
うをる新恋をあるる魚
人はあひらるる時ハ
ふをいるる銀下ひるはとまて
るる事なをのいふをくかひ
をををこうくるくるこ
をくハかるあるんと魚かしるこ
へし法説人ハ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

古とそなふるなり
そなの海人れたるやそしまを
なぬまふるを引て作りし
古今集東十四よみ人しらず
としてい上京の稚也俳諧のまりなくして
上臈しきそくこと古来稀ならんとあり
不遜覚悟の邪ふなひ貴あるとなりとそ
河内紀行ふ重の風丹さ迷られてよ我へる
ひくといふ、ふる祇須人の心此要をる而をと
をくもいそて塩焼煙風祇いさをもをぬ

方丹といふ不心詞尚云あり
ひとりあるこやをめふくぬて
ふるすてら弓時欲
なっこ庭ぬ余のかに
紀心あらんん
五月丹おくらぬとひて赤に月か
きといふ八何と御
そとてあきのの
らぬ余のうら不忘月ハ
きんそとそて

うやうに而ハ弄よむ人の心なきへ一先生
ふるくよりぬ爲に書たまふとハ説也
むかし仁和のころせうり行業しるひ
きくはいまさらの事ハ無きなくはひ書れと
そをつさにけり事あまたハ書たりたり
ひみくはつをせたまひけるをもりをねの
たまにかたつはきる
きくに勅命ありて宣旨成本不可有之と貴本皆
義文不可止とのり宣奥書ハ仁和聖日之間
せうにて一事ありせうりの行業ハ業平卒
去ケ条後の事ありて業平一紙の事故
ひくふはは事をのはんにあらんと云
儀なりられハ作物語也伊勢ハ業
平の身上の事をかくとをもるを
せうの物語也後ハ事も在原氏の事ハ
業平死亦儀なきハそのよしあるなり
て事かくこと也きりは業ハ滅亡皇孫
業ハ始なり後撰集ハ寸五雑一巻ハ詞書ハ
仁和の御門儀にて世りは例ハくせりは行業
ハ日在原行平朝臣　さのやま

ゑ[illegible]絶ふ[illegible]行川の子世代ゆく道のごと
[illegible]今はゆ[illegible]平也光孝天皇也仁明文徳清
和陽成は四代八民はいとさかりをおぼ[illegible]て
野行幸停止ゆ[illegible]光孝乃時代仲国真也ゆくこ
とゆゑなく行平古今十九歳乃時ゆれハ鷹飼不
似合事なりゆゑつきにゆゑ書うひ内宇堪
能すく[illegible]ゆけ[illegible]ゑ[illegible]ゑの行幸ゆは切者
と賞をら[illegible]ふ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ後撰集ゆ十
五雑一首あり初句丹和なし自詠ゆ[illegible]ふ
てゆ[illegible]ゆれたりとゆ[illegible]つゆれゆ[illegible]ゆ[illegible]

てゆ[illegible]つけけゆゆと有　さゆの山ゆ幸ゆ入ふ
ゆ[illegible]ゆ川のゆ世はゆる道ゆいゆ[illegible]ゆ
同日乃事なり奇物語ゆ[illegible]さの〳〵用に〳〵
ゆ[illegible]事なれゆ[illegible]動入ゆ物ゆ尺ゆ時
用のものをひきゆ世ゆ結句儀理の実さ
ふりのゆり結可思高乃ゆ説なり
たゆれさひ人なとゆめゆゆ仲ゆ
川を渡ゆゆ　　おゆれさひ人なゆ仲ゆ
おゆれさひ人なゆ仲ゆ
はむゆれゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

平今日は此道を通りて四月十日は
一体一家の邂逅の行業なれば是非にて
やうやうかの方人みとりあ様なふりこ
世尊何とぞ思へきれといふありれきさひ
さひの岡の家也宿の家なる宿縁なと夢也
おなやきの法華きあり
ひを知りひなれとうらねは人はきとはひあ
ぬとや
清門の法心、すらすらあり也行平は様子六
十五あまり七十五おれふ事とあきらも

法師法門五十七歳みとおはすませはかりみ
うらせうあるあるとうをを不吉
様一めなり我身はうへの西嶺はもも
ともの氣みあるさらんあとはとくす思意
事あり法心つらい万事ふあり事あり
おふへしくくと法華経也成道ふ法華と澄
春はふい物とそとはうへて清門法氣色
をうう澄春高石のまとあまれ法華経の中
に託を此事大不可法宝部ひを法禅園
法物をもの也聖道を

ひとりのくるしみてはなはだこゝろ
こゝろいとなんといふらんの女ゆゑうて
うまのくれひけをとゝかせんとそれはきぬ
こゝまとゝいふ所みくさけのまきくさめら
れきの外てをやくらりもの
ゆへのはくれるりをきりきはをやこ
古今小性物の名は紀氏墨流の奇事小野
小町うちなら他物語はなりそれは外を
やこゝ内奥別乃名不也て福年あはを貴乃
あてをやこゝまとゝ所の業年事別中世小
次郎兵衛はをくへてやくらりをりきをもを
きれあて居の字うあ所屋紙次ををりう右屋
れ字を中也
ひとりあとこをろ小みうれくあまてあひ
いはをりを系不りふ人よいひ屋ら
浪間より乃あうこゝ内はれをあひをひ
くなりね右をあひ乃をんく
序所ありひさゝをありね右にあひ乃をと
いをんとそ上句をはいあをうされとも波路を
為をうれをを為をありをあひさゝ

事愚見知顕抄なとてうさ海しくれあとは
さとをみいてさうあとをとき抄ほえんあう
をあひさしたくさあはあるあをりふへし
とあひさ——いさひさ——なといふこと
——定あやくまれ法華の法供養まいりて
新家三首の中無上菩提といふ題をよめ
京中は物語と本ふかとまち　をとのねあ
の海のをあひさ——ひさ——をあふ秋乃ちう
はをあれ家は心なるねれ影乃夜乃文字為
毛にあるあまさ物語のをあひさしををあひ
さをと学ふ乃中あるりまさをれるふかりて
とるに年寄りとんあ毛也ゑあひ乃ふく
あひんねと云詞也所説ふはたをいさあの
うけうけうをひさ——あるをあひ
さといふとあり
何事をみるようあるりてきりとんいひや
里者
業平の身上なるふをなくなりうと
心やをく出まくをこと利天あり前世文なと
乃をを業なるへし馬上ふ相逢紙巻形

倭語類平安の心ばえ
ひとりごとをみよ小行幸たまひきと
文徳天皇天安元年行幸といへるは國史ふみを
要録あるを見れば新古今ふみ山刻のあとくに伯者
ふみ行幸ありし時とのせられたるいつまで御
門の行幸とは見えるを國史ふみをもとしれば
とれふみや
我見るとしひさしをありぬ伯者のきしれ姫まし
いくせへあらん
古を集めすせよみ人をとうすの乃ものせ文徳天皇

乃御製といふは不信用なるべきなりと可見
なり奇の心は明るひめ松男説にはふ松といい
へとも山きーのあ松ふく姫ふんなり
いくせとくてあらんといふ也
おほん神をきやうーたまひて
けきやうは現形ふや神神のあられ給ふ
ふるり祈伯者の大神とやはひいさるに
のごことけくーの猪代のあるにうるふく
内稜ーたまひしとにうわにつまてう
うたあるそれ之後ものあらまく

[illegible]その中ハ世[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
乃浦の社と中[illegible]
[illegible]社ハ[illegible]
[illegible]その[illegible]社[illegible]
[illegible]社三社ハ[illegible]
[illegible]
朝乃浦[illegible]橋[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]社四[illegible]
[illegible]社[illegible]
[illegible]延[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

けきやうを給ひて世をもてなす撰集すべし
語をひさの世物がたり事名誉をいふ面白欲
実少は文徳天皇安元年行事といへども四
史少を賞揚あるべし新古今のもろの物語
をひさの世ふれとも門の行業と
をかしいとはいかに拾遺の事也又国史は
をもるべしやあらんなきをもたりやとはいふ心
きりはあり紀ひさ賞とはんん
拾詞ありひさ世ひ尚物語の事

なめへ〜しかみの雑ものこれ紀
のひさはせひ物ひをめてきこの
ひとあとこひさをとをきをもるに心
をすまりこんといふ面白なれば
業平乃女れのことへひさをとつまをとと
あり私曰ふれとも忘る心をのまいる
ふんといふと業平乃初ふれい奇と詞いさ
さうは遠のやうあり沿ひ世ことといふ
下ひやそひさくをとをせてわをろ
心をすまいるこんとあるいをせて

くまなく伝へさせ給へとぞいふ
なるべし作者の名はあら
ぬ玉つばきの物がたりの
うきまくらをなぞらへ
古今東西四海人ちすの
てたまへていふ也撰ぶは
所といふと見てとり
ハやめていふをいふ
乃本ひとの
代あらこちへとりつ

ふ心とありていふ
う連ねうすといふ也
ひとり女のあるあり
ふりのこうもを
かうこそとあるとす
もあるまゝ物語
あるハ仇也は物語
はあると渡てしむと
ちさハあらあ
也その中ふあるを開也

ふ意こんといふも
ひとこれとそ
ふ意ハ
れ
ハ仇とのけ古今
ハ説あり説なる
説
説

思ひそめたりし人の前の萩はなほ露ふかき色にぞ
ふる花をあはれと思ふ仇と嫌はれぬ女の髪中
はなりあり松枝殿の
さへ　ふり　山詞書あるを
見られてよしなきふや
思ひ　ものこ女のまこよへ
人の虫をとまるのひてのきあそのちも
毒　　
よ　れの未嫁男のそとあまねと思ふ
の人　ひ　いふ事をきくて業平

乃ちあれあり
逝にあり行くまのまうとくせうつまあれ
人代人への数ん
拾遺集第九　入ちいかもいかも行く
まのまうとやせうんとかられらの事
人のあまれくもう事あまいれ及はれか
ものまなくみ色きと人は心かいとなり
それはその人あれ強うんをいあり
ひ　ものこ梅つわもり
りいつるを乃く

萬ぶ花とぬぬてまふうさまふかめろかりん人ま
さきくへさん
催馬樂にも柳をかくさいとまりてうこひ
ぶ乃ぬふてまふのさいひめのそれろ侍ろいふ
とりてよりひめ侍やりいつろを見
うくひまの花をぬふてまふうさまふ求とよりり
むうあひうり物臺嶺花今乃夏山巖の名也
くへ
萬ぶ花をぬふてまふかさいいかりひをつけよ
やしてくへけん

萬乃ふれをぬふてまふうさい不重あをなす
花をふれふさ乃ふつさをつあくこ面ふれ
さあうはその心さを新やんとなり見ハい
ひけうふ寄ろぬろりなとあきハそれ
丹射ーてやしてうあ面けんとよりりりひ
小夫をもさせとりり引ひ紙つきよを書みく
やハ面花といふるり　面ふきをみくひとぬ
ふ〻我神の如ふ花引ひふ侍ふぬやをき
見をおりひを夫にしてよりり　みくう
ぬ人乃きせうぬ書ハ四ひてーあふ侍今

かゝる記事

ひとり井とこらきれるる事あやまれる人は
ちきりとく事あやまきて誓物を遠ゐる也
山ゐの井戸の玉水をふひとりこの月の
ひとゑ記世なりきり

一儀は井戸を尤大臣北坂地面白しよりて井
戸を新造あり山ふき我うへなをしてこ
の水を発せり我一名の後ふを我我男ひ出さ
ゝは水八来て凡よ新をうゝして見せんと
いふりのちりゆれて見まとそのうけの

見あるあとをみさやうの事をなりひおて
よあれ小や大和物語にひとうと称見たち
けるん人おはわれ見くくつひにやまとの
國にをうきりけ井てといふまを丹井よ
けるん人の家ちりをうをもくいそをそ
らのいく人を見くきてるけをいくだう
けるるみをいとそそうとれをれをそ見は
ちらのうれいとおゝりあるれハめを
やくそそのあくちいくことひなれは山
女ちりきうちらかくてるるいとたうしけ

ありけるはゆめかとおもひこしかなしう
あひ見えぬまきはまりあるあんなりにま
りぬんといひてかれをのこるふしぶしを
へとてはひをときてこうせきをさてこのし
うりけるあひだとりてもうきをうふそ
ふひきゆひををしをていねこれみをしを七六
けなりきりこの男をこのをあるきをんなれ
ハいふてをんなりけるをまをとれるいを忘
さしに男ををうりをいをくこはをやうりけれ
ふきりのくて七八年ありてあれ

つひてをさまてやまをくいてをそなて
ひるをうりてやをうりて見をはあ魚に井をん
あをけるををまをあるくむををあるうりを
やう
といひ魚をといを魚をを
ひしはをこをりをうり源をうをみけるを
やうくあをををみやりひをんのを彩をを
ををみをを
年を魚を位こしをを
源を背をやあるをん
をををいをハいをを

古今集第十八業平朝臣とあり彼の心はう
比面てをみこしを面ていなをいくくぬ
うをさけとやなりんとすてくの後は女はこ
そ後を堪へ所にう心さ詞物也　あを
をしる秋乃面して飯あをまりて法うん嶽の
又くれ
女くく
野となりハうつると殿てゐるおらんうふたよ
やハ右はこさらん
古今第十八よみ人しらの哥なり題とゐを
里ゐんをいとこ入でのとあらは移とゐ
里てなくくとりうめゐをもらよ題ゐ変
ハよをあり　をゐ物はし字り乃ハ
物りくりりそめのりり應有春意化為
燕平今業八未史樓といふのこと　夕され
はのへ乃秋風ゐ志乃く移りく也源業乃
里とよゐり後撰代哥を後面りくし秋風ハり
里ゐくおそゐ志ひといふりありきく雑
りくりり法後撰のをて業平風の身無
ひをおゐてハ如なり移くゐりて乃

ゑを好みしてふうくわしかされた
ばとなり物りるき事ゑり
とよりりけるてけりゆうんとおりふある
ろなくきたにきり
ひりとこいうゑりきる事を好ひけり
おりふゑりんあ所
何事を好ひきるふや古注をいろく
の儀をいふ或ハ云云の大事なをいふを
くをお遠也すて1詞書をいうゑる事
を好ひけるおりふゑりをきをいかふ

してゑる色紙をやく一切れ事知者あり
これハゑりはさぬのの也業平のお生をるに
そふと云ことを云へうに志ゑりを後におし
えうひてなふことを知りひられなをいく
ふハ和歌といふ色紙歌伯牙絶弦のたぐひ千
和の壁伯樂ゑる乃類也されいをとつけま
きとは説ゑり
おりふあをいて慈ゑるにやをぬ色紙桜とひ
ゑき人しかなれは
ひ不可れ儀理をは琴をきれをくられを

くこのうさをしまりを心にしめうこえあ
やまりハあるまじき業とりうり法説なりよく
く可思道を　男ハ事をとふ人のなり
ふらんあるけハそれ月そさやあ業とうあ
ふをしかるまりをくよりあり
ひとり井をこうつひ心地一ぬへ也部屋え
るれは
つ井りの道をなるて男しうきのふらふ
るは業をハうりしとをハ
きのふまてをふとはおきはぞりとをふ

儀を大をふきるなるくきのふらふは
業をハうりしとをんうへし見行一切衣生八諦
世世くあるる事をは志道とをそのさハよ
あてハ井をるかぬなるひるり大和物語よ
は中將山ををもんてをんをてをおをんと
かをりは物語りを業平は始終をあるる間元
服乃始より獲麟の夕まてをしてをるやる
め侍り竜樹のをりなる物をや法説をつぬ
ふ行道とハとある法をとあるるをよてハる
を講説すと前ハ井ハ法をうるをるを

之業者[illegible]とのあらせられてよりけらり近
來八清濤天皇より御物語あり業平元慶四年
五月廿八日卒五十六歳三代實録丹見えたり
元慶四年より文徳五年まで七百十六年欽年
月代別星行云世間の變常をよく〳〵思
へし〳〵

天福本之奥云
業平朝臣　二品弾正尹阿保親王五男　平城天
皇王子　母伊豆内親王桓武第八皇女母藤原乙
從二位乙叡女　年月日任左近將監　兼和十四
年正月補蔵人　嘉祥二年正月七日從五位下
貞觀四年正月七日從五位上　五年二月十日左
兵衛權佐　六年二月八日左近少將七年二月九
日右馬權頭十二年正月七日正五位下十五年正
月七日從四位下貞觀元年正月十五日左近權中
將十一月廿一日從四位上二年正月十一月相模

權守二年十月義人頭四年正月十一日義濃權守
同廿八日平
親王　平城天二　女正五位下　蕃良藤継女
貞和九年十月薨　贈一品
行平卿　阿保親王一男
天長二年　仲平　行平　守平　業平　賜姓在
原朝臣貞和七年正月藏人十二月辭退廿日從五
下廿四十二月二日侍從十二年正月從五上任左
兵衛佐五月右近少將仁壽二年正五位下右衛二
年正月四位同幡守四年兵部大輔天安二年二月
中務大輔四月左馬頭二年正月構戸守貞觀二年
六月因逐頭八月廿六日左京大夫四年正月信乃
守同月從四上五年二月大義大甫六年正月十六
侍從權守二月八日兼左兵衛督八年正月正四位
下十年五月兼備中守貞觀十二年二月十三日參
議五十三廿六日左兵衛督十四年八月廿一日義
人頭十五年從三位大宰帥元慶元年治刑卿十月
十四日別當六年正月中納言六十五八年正三位
刑卿仁氏和元年按察同二年四月十二日致仕
寛平五年薨

紀有常

承和十一年正月十一日右兵衛大尉嘉祥三年四
月二日危近將監四月廿人五月十七日兼近江大
掾仁壽元年七月廿六日兼左馬助十一月甲子從
五位下二年二月廿八日兼但馬掾三年正月十六
日右兵衛佐四年正月十六日兼讃岐掾轉左兵衛
督衛二年正月從五位上同十五日左近少將天安
元年九月廿七日兼少納言二年二月五日兼肥後
權守貞觀七年三月九日任秋部權大輔九年二月
十一日任下野權守十五年正月七日正五位下十
七年二月十七日任雅樂頭十八年正月七日從四
位下十九年正月廿三日卒年六十三
二男右　中納言左兵衛督贈右大臣長良女
女紀伊守従五位下　五節舞妓同八
貞觀元年十一月廿日從五位下五節舞妓同八
年十二月女御宣旨九年正月八日正五位下十年
十二月廿六日生第一皇子廿七帝御年十九
十一年二月立為皇太子十三年正月八日從三位
元慶元年正月二日即位日立為中宮廿六　六年
正月七日為皇太后宮寛平八年九月廿一日停后

位延喜十年十二月薨六十九　天慶六年五月追
授右位
河原左大臣蝶　源氏十二
兼和五年十一月廿七日正四位下元服月六年壬
正月乙酉従八年正月相模守九年九月己亥近
江守十五年二月右近中将兼参作守嘉祥三年正
月七日従三位五月右衛門督仁寿四年八月兼伊
勢守斉衡三年九月任参議右衛門督伊勢守如元

みそなへ
万葉集第十八
郭公こよなわれ恋をなくよにかそへそめ
けりとえん
古帖哥
ひとへかすかすこの竹のきぬ竹のよしをや
れとそなの人をなす
宋玉神女賦
素願幹之醸寒方志解桑命　豊岡

曹司建治祈願
壊漆艶逸儀静體閑
見風ひ見やひらるといふ詞
そのあくろやひらるといふ
やりかおなりあるあり事歟

天福二年正月廿日己未申剋遠業〻之育月連
日風雷之中邂逅書寫為授鐘愛之孫女也
同廿二日授手

世間流布之本奥書云弱義之略之其奥書之次云
三代實録云應四年五月廿八日辛巳従四位上
太近衛權中將兼參議權守在原朝臣業平卒業平
者故四品阿保親王第五子正二位行中納言行平
之弟也阿保親王娶桓武天皇女伊豆内親王生業
平長二年親王上表曰妾品高岳親王之男女光

停王号賜朝臣姓臣之子孫末頭改姓既為昆弟之
子寧異遠列之若於是詔仲平行平守平等賜在原
朝臣業平餘良因麗放縱不拘略爲文学善作和歌
貞觀四年二月授従五位上五年二月辛巳兄門依
數年遷左近衛權少將尋遷太馬頭累加至従四位
下元慶元年遷為太近衛權中將明年兼相模權守
後遷兼義濃權守平時年五十六

光仁天皇才一皇子

桓武天皇

平城天皇 嵯峨帝

才三三品弾正尹 贈一品

阿保親王

大江音人

在原行平

在原守平

在原業平

在原仲平

棟梁

右少將従四上 為高階茂範子 子孫見被流

元方

師尚 母斎宮怡子

高階峯緒為子

才小野宮

滋春

惟喬親王 母紀静子右虎女

母高子

陽成天皇

貞觀十三立太子二才

才七 母行平女

貞數親王

才六 斎宮 母同惟喬 貞觀元十丈五卜定

怡子内親王

才四水尾帝 母順子

清和天皇

田邑帝

文德天皇

深草帝

仁明天皇

小松帝

光孝天皇

才子

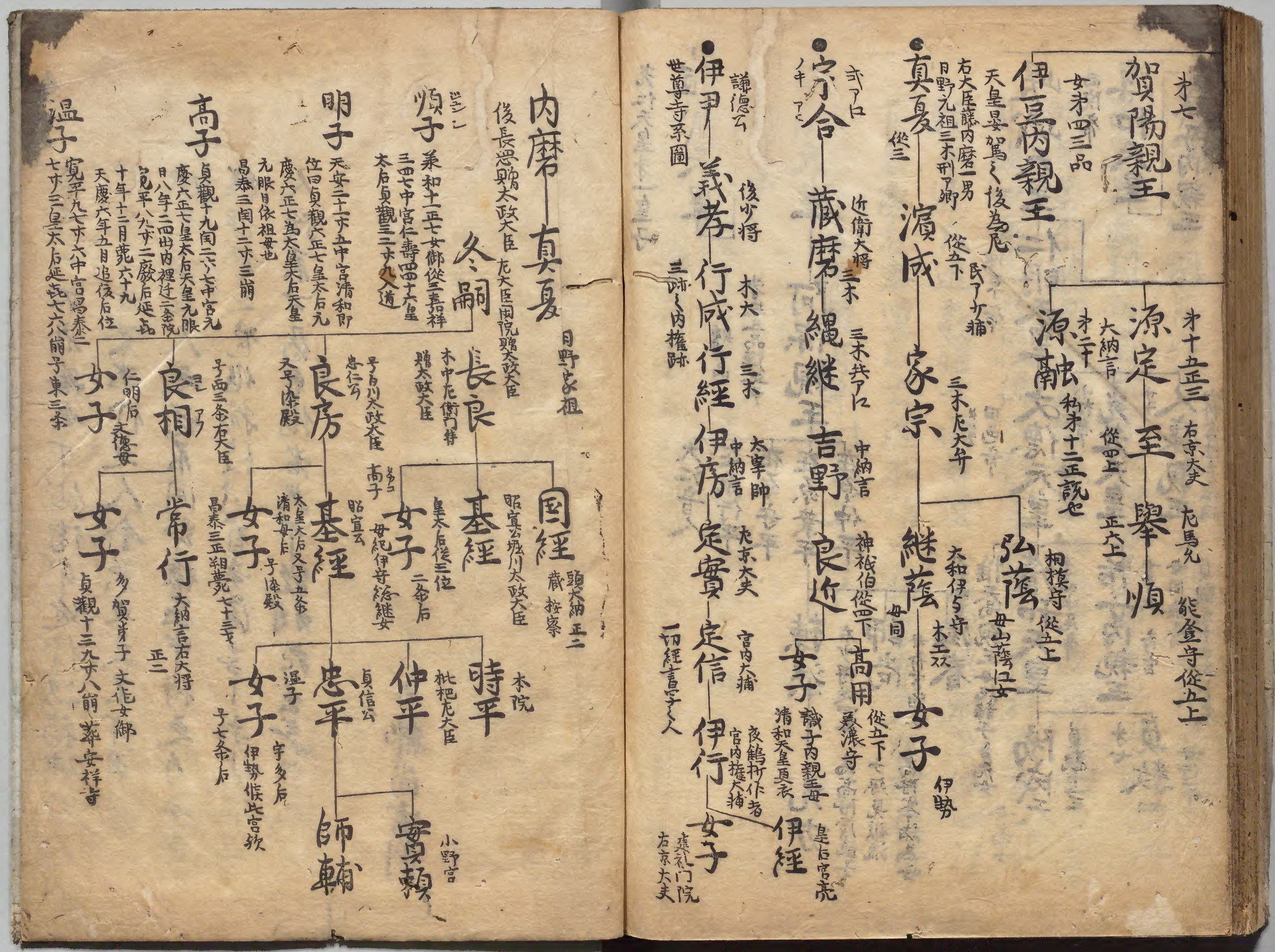
人康親王

山科宮法名法姓

西院帝

淳和天皇

崇子内親王


賀陽親王
才七
女才四三品
伊豆内親王
天皇妻賀茂後為尼
右大臣藤内麿一男
日野九祖三木刑卿
従五下
氏ノ女捕
真夏
従三
濱成
家宗
弘蔭
相模守
従五上
母山蔭ノ女
継蔭
大和伊与守
木工頭
母同
女子
伊勢
源定
大納言
才二十
源融
和才十二正従七
三木左大弁
才十五正三
右京大夫
左馬允
能登守従五上
挙
順
従四上
正六上
宇合
式ノ卩
ノキ
蔵麿
近衛大将
三木
三木共ノ卩
縄継
中納言
吉野
良近
神祇伯従四下
高用
従五下
美濃守
女子
織子内親王母
清和天皇更衣
伊経
皇后宮亮
夜鶴折作者
宮内権大輔
女子
遷礼門院
右京大夫
伊行
宮内大輔
定信
伊行経
一切経書写人
定實
右京大夫
定房
中納言
行経
太宰帥
伊房
木大
三木
謙徳公
伊尹
義孝
後少将
世尊寺系圖
三跡ノ内権跡
内麿
真夏
月野長祖
後長恩贈太政大臣
左大臣兼院贈太政大臣
冬嗣
順子
兼和十二正七女御従三品祥
三四七中宮仁寿四十六皇
太后貞観三三十九入道
長良
木中左衛門督
贈太政大臣
明子
天安二十十五中宮清和即
位母貞観六正七皇太后九
慶六正七為太皇太后天皇
九眼目依祖母也
昌泰三閏十二十三崩
高子
貞観十九閏二八七中宮九
慶六正七皇太后天皇九眼
日八年二四出内裡辻二条院
寛平八十二廃后延喜
十年十二月薨六十九
天慶六年五月追後后位
温子
寛平九七十六中宮昌泰二
七十三皇太后延喜七六崩子東三条
国経
頭大納正二
蔵按察
昭宣公堀川太政大臣
基経
皇太后従三位
二条后
母紀伊守紀継安
昭宣公
時平
本院
枇杷左大臣
仲平
貞信公
忠平
師輔
安子
小野宮
良相
子西三条左大臣
仁明后
文德安
常行
大納言右大将
正二
多賀幾子
文化女御
貞観十三九十八崩
葬安祥寺
女子
女子
太皇太后又子五条
清和母后
子陽殿
昌泰三正朔薨七十三
女子
温子
宇多后
伊勢侯此宮歟
子七条后
女子
高子
子白川太政大臣
忠仁公
良房
又子染殿
女子
南子
昭宣公

合參考而用捨也可傳說年近代法猶使要為
當之年近來代之人今案也更不可用之
此物語古人之說不同此據在中將之自事我
轉傳轉之毫髮拙技什有事為事一出上古之
人強不可為毫髮者只可說利花玄義而已

戸鄰尚書判

山物語の抄本等こゝろあらまほしき事共乃い
とゝなくてひなしくゝ也侍りあめゝ八象
玄講後はゝのうまるゝ毎紀伯ゝを紀伯ゝ
とゝしくうけ給はりて侍りとゝ
乃心さしを忘まりふを以よりされつゝ二光院内
尊そのうゝゝゝゝゝゝ忘ゝ毎りゝ長器とゝ
ふふく御講尺河りゝ学書抄里やく侍りゝ
を見いくゝゝん毎ゝそのあり礼数余に予乃祖
父環翠軒宗也道遍院殿へ聽学やゝを惟清抄と
ゝけゝん毎りゝ為を題をもて有旨不足を

ゝ業まへゝと侍しのはおゝのゝ心よりゝこゝ乃
やゝふ引合てゝるし侍はけ侍ふ抄ゝ礼講義毎雲
完文大学寺猛石義後聖後院唯石道増寺ふ宗雲
語巳なとゝいゝゝてう毎ゝ毎れよひし後
りめゝゝて愚見肖学おの諸抄をあゝ也侍説
乃儀ゝゝゝゝ礼てゝれを用拾やゝひ論語抄多
学関疑抄ゝ礼ゝゝゝ尺ゝゝゝよて関疑をきて
此抄乃為とゝそのゝ心あまれ里やゝゝすやゝと
ゝふ毎紀ゝのゝゝ時文禄五年仲春十五日ふこ
書礼ふふ者也

法印玄旨　在判

此訴訟相為存乎彩帳之如也向後見與奉行亦被
尊之旨侍ハ下ハ被免許書写深秘幽底莫出窓外
尊

慶長第三孟冬十五日　　也足叟素逸　在判

御奉行頭二条
仁右衛門　活板之

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan